

---

# トレジャー

空風灰戸

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

トレジャー

### 【Nコード】

N4567E

### 【作者名】

空風灰戸

### 【あらすじ】

トレジャーハンターのグランとルリーは必ずお宝のありかを示しているというパズルマップを手にした。そのお宝を手に入れるため、ワイト諸島の島々に向かい、パズルを捜し求める。そして、その宝の正体はいったい何なのか。小さな島々をめぐる異世界海洋冒険ファンタジー。

## 第01話 「パズルマップ」

ランプの明かりだけが頼りの真っ暗な地下室で、初老の男と若い男女が話しをしていた。

「これがそのパズルマップだ」

初老の男が若い男に地図が刻まれている四角い石を差し出した。刻まれている地図には昔の海図が刻まれている。

若い男がそれを受け取ると若い女が言った。

「じゃあ、この石みたいに地図が刻まれているものが残り三つあるってことね？」

「そうだ」初老の男は言った。「パズルマップはパズルになっているのだから他にも同じようなものが存在する。そして、この地図が完成すれば高級なお宝が絶対にみつかるという代物だ。めったにこいつは手に入らないし、パズルを探さないといけないからかなり大変な手間がかかるがな。お前達みたいなトレージャーハンターにはいい代物かも知れねえな」

「褒め言葉として受け取ってあげる。代金は？」

「一ポンドとなっておりますぜ」

若い男が代金を払うと、男は言った。

「ところで、旦那。店のほうは繁盛してるのか？ こんな活気ある島に骨董品屋なんて繁盛してるようには思えないんだけど」

「繁盛してるとはいえませんが、グランさん。しかし、生活するぐらいの金はありませんがね」

「そうかそうか、ならいいんだ。もし困ってるなら」

若い男 グランが何かを言おうとしたのを若い女は制止した。

「旦那さんにはお世話になってるけど、ちゃんと金は払ったんだし宝をやるなんてことをする必要はないわ」

「ルリー、そんなこと言うなよ。おれらグリラル団の本拠島がここになったのもランズさんのおかげなんだぜ？」

グランとルリーはトレジャーハンターであり、グリラル団は彼らのトレジャーハンター団の名前である。だが、団員はグランとルリーの二人だけである。ハンターとしての活動をするための本拠島はこのギート島で、ギート島の骨董品屋の旦那　ランズがお宝の地図やらを提供してくれているので、彼らはハンターとしてやってきているのだ。

「それは認めるけど宝をやるほどでもないわ」

「その言い草はないだろ」

「まあまあ」二人の様子をみかねたランズが間に入った。「ケンカしなさんな、二人とも。俺は宝なんていらねえしお世話になるつもりもねえ」

ルリーはランズの言葉が終わらないうちに地下室から出て行ってしまった。すると、グランは言った。

「悪いな、旦那。ルリーは相変わらず冷徹な奴だから」

「いいや、ルリーさんはいつもそうですからもうなれましたよ。ささ、がんばって宝でもみつけてきてください」

「うん。じゃ、ちゃんとこのパズルマップは受け取ったよ」

「まいどあり」

グランが外に出ると、ルリーが彼に背を向け腕を組んで待っていた。金髪の髪は強い日差しによってグランの目に輝いて見えた。強い風も吹いているがショートヘアのルリーの髪がなびくことはない。

「さ、早くその地図がどこを指しているのか確認しましょうか。基地に戻るわよ」

ギート島は活気あふれる島である。漁業が盛んでワイト諸島の島々の中で一番の漁獲量を誇っている。島の中心部の店々　全部の店が屋台である　の人々も元気な声を出し客を引き寄せている。客達もその声に引かれ商品を買って行く。そんな町だから暴れ者や不良などというものはおらず、荒れることなどめったにない平和

な島でもある。

唯一、不良といえばこの島で生まれ育ったグランとルリーである。トレージャーハンターは海の荒らし者とも言われている。ほぼ海賊と同等の意味を持っているのだ。だが、グランとルリーは普通に島で仕事もしておりトレージャーハンターであることを知っているのは骨董品屋のランスだけだった。

彼らは島のはずれに一つぽつんと建っている家を拠点として活動を行っているため、地図の解析もそこで行っていた。

グランは落ち着かない様子で家の中を歩き回っていた。彼は小柄ながらも活発な男で動くことが好きなのである。船の運転も自らで行いたくはないのだが女性のルリーに船の舵を任すことはできないのでしぶしぶやっているほどだ。

「どうやら」ルリーは唐突に話し始めた。それを聞いたグランは動きを止めた。「この地図が表しているのはアイテン島のような」

ルリーはそう言いながらもパズルマップと海洋地図を見比べていた。

「アイテン島ってここから西に三十マイルにある島だよな？」

「そうよ。おおよそ四時間半の船旅になるわね」

「よし、じゃあ今日は明日からの冒険に備えて準備するとうるか」

翌日の天候は思わしくなく今にでも嵐がやってきそうな日だったが、そんな中、グリラル団の二人は出航の準備をしていた。二人の船は木造小型船ながらもしっかりとした小さなマストがある。小さなマストにはあわず帆は比較的に大きめである。

「本当に大丈夫なのかね？」港に来ていたギート島の島民が二人に訊いた。「嵐が来てもおかしいこんな日に出航なんて」

「大丈夫大丈夫」とグランは答えた。「嵐が来る前にアイテン島には着くさ。それにルリーもいるしな」

「だが、そんなに急ぎの用事なのか？ こんな日に出航するなんて」ギート島の人々には彼らがワイト諸島の島々をめぐる商人であることになっている。この日の出航もその関係で出航しなければなら

ないことを島の人々は思っていた。

「早急にしてくれとのことなのさ」グランは言った。

「準備できたわ」グランの言葉が終わらないうちにルリーはグランに言った。

「よし。それじゃおれらは行ってくるよ」

グランは操縦席に入り舵を手に取った。ルリーは船の一番後ろへと移動した。

「それじゃ、ごきげんよう！」

ルリーはそう叫ぶとなにやらぶつぶつ言い出した。

「我に風の力を授けし！」

最後にそう叫ぶと船の帆が突然強い風を受け始め船は出航した。

そして、そのまま船はギート島を後にして西へと向かって行った。

船旅はそれほど愉快なものではなかった。海は荒れ始め遠くには雷雲さえもみえ近々雷がなり始めるに違いない。まだ出航してから二時間とたっていないときなので、その嵐に巻き込まれるのは確実だった。だが、幸いにして風は西風でアイテン島へ行くための風をルリーがわざわざ魔法で起こす必要がなくなっていた。

ルリーは生まれた頃から魔法が使える。いわゆる魔法使いである。そんな彼女の両親はすでに他界しているが、母親が魔法使いであることは確かであった。その母親の血がルリーにも流れ、ルリーは魔法が使えるのである。ただし、父親は人間で魔法が使えないため簡単な魔法 例えば風を起こす しか使うことが出来ない。

魔法使いは近年ではほとんどおらず、数々の島をめぐりわたっているグリラル団でさえ魔法使いだったものに会ったのは一度しかなかった。もしかしたらもつと遠い国 大陸の国々 ならばもう少しはいるかもしれないが、それを彼らが知ることはなかった。

ひどい嵐に見舞われた二人の船は大きく上下に揺れ船内はびしょびしょである。グランは思いつきり船を操り、ルリーも振り落とされないようにしながら帆に風をあてさらにスピードがでるように仕向けた。そして、早く嵐から逃れようと努力をした。

「まったくこんな時に出航なんて無茶だったな！」グランは舵をうまく切りながら叫んだ。

「地図が手に入ったらすぐ行かないと誰かに取られるかもしれないでしょ！」と、ルリーは叫び答えた。「そんなことより船を動かすことに集中してよ。こんな所で死ぬのはごめんだわ！」

それから一時間後、彼らの船はなんとか嵐から抜け出すことができ、彼らが鯨のえさになることはなかった。

だが、ルリーはほっとため息をつき休憩をする暇がなかった。風向きが変わり、ほぼ向かい風となってしまうているのだ。そのため、魔法による力で船をおして行かねばならず、船の原動力となるしかなかった。

それからやつの思いでギート島から西に三十マイルの場所にあるアイテン島へやってくることができた。

## 第02話 「廃坑の光」

アイテン島はこれといった名産もない島であるが人々が住む家々は充実しているものである。港から一番奥にある標高千メートルもない山からみる町の姿はとても美しいものである。美しい色をしたレンガでできているが、皆その色であるため統一感があってとても良い風景になっているのだ。ただし、例外として港だけはレンガではなく木工である。

グランとルリーは港に船をとめるなり、上陸もせずパズルマップを調べた。パズルマップに書かれているのは全体的な地図であり、アイテン島について詳しくは書かれていない。そのため、アイテン島のどこにピースがあるかがわからないのである。

「なんでそこまで考えてないんだよ」グランは地図を調べたルリーに文句を言った。

「わかるわけがないでしょ！ 本当にどうしましょう？ アイテン島は広いしなあ……」

「だったら町でも行くか」しばらくの沈黙の後グランはそう提案した。「もしかしたら、何か情報が入るかもしれないし」

「町に行っても何の情報もないわよ。パズルマップのことはほとんど知られていないほどなんだから」

「ああそうか。じゃあいいよ」グランは少し怒った口調で答えた。

「おれ一人で町の中を歩いてくる」

グランは上陸した。すると、近くにいた水夫が二人の仲をみてなにやら感じたのかグランに話しかけてきた。

「お二人さん怒りなさってどうしたね？ 何か悪いことでもあったんか？」

「別に」

グランはそっけなく答え、その場を去ろうとした。すると、ルリーが水夫に何かを尋ね水夫の答えをグランは聞くとその場へ戻って



きて再度その答えを言うように頼んだ。

「だから、山に登る途中の廃坑に宝があるって噂だ。まあ、その宝目当てで探したものが何人もいるがみつけたものは一人もおらんけんが」

グランとルリーの目が合った。お宝　もしかしたらパズルマップかもしれないし、そうでなくても彼らはいいい情報を手にいれたと思った。宝！　それこそ彼らが欲するもの。

廃坑は山に登るための土の階段から一マイルは離れている人の目につきにくい場所にあった。その炭鉱からはあまり石炭はとれなかったようで、入り口はほとんど黒くなっておらず穴も小さかった。

辺りはは暗くなってきた。ギート島を出発してはや六時間。あの嵐さえなければもっと早くこれただろう。それに、雲も空一杯に覆うことなくまだかすかな日差しが残っているこの時間。彼らは嵐のもたらした結果をつくづくうらんだ。

廃坑の中は暗く明かりがなければ何も見えない。そこらへんにある手ごろな枝を二本拾い、一方の枝をルリーの魔法で火をつけ辺りを照らしながら中へ入った。

廃坑内は一般的に知られているイメージとまるつきり同じだった。ただ、天井が低くルリーの身長でぎりぎりなほどであった。かつて昔、ここでは女が働いていたのかもしれない。男達が働いていればこんなに天井が低いわけがない　とグランは思った。

アイテン島はかつて戦争で厳しい傷を負った。女でさえ兵隊になり戦場　海の上だが　で戦ったといわれている。そんな昔話を知っている人物がこの世にいるという話をグランは知っていたが、その人物がどこにいるかまでは知らない。

廃坑を進むこと数十分後に彼らの前には行き止まりが待っていた。「おかしいなあ。ここまで一本道だったから横道にそれることができるはずもないんだけど」

行き止まりをみてグランはつぶやいた。するとルリーは言った。

「いやここで正しいのよ、グラン」

「どういうことだよ？」

「これをみて」

ルリーは服にある大きなポケットからパズルマップを出した。パズルマップはもらったときの石のようなよどんだ色ではなく、金の石とでもいうように輝いていた。

「石が　光ってる」グランは驚きつぶやくような小さな声で言った。

「もしかしたらパズル同士は反応しあって光だすんじゃないかと思うの。だから、こちら辺　または奥にピースがあると思うわ」

「よし、それじゃあどんどん奥に掘り進めて行くとするか」

グランはポケットから小さなスコップを出した。そのスコップをルリーに渡しルリーが何かを唱えるとそれはたちまち大きくなり、通常のスコップのサイズになった。これはルリーの魔法で、大きくしたり小さくしたりすることができる。この魔法を使えばもしもの場合、船をポケットに入れて運ぶことも可能で非常に便利な魔法である。

グランはせっせと穴を掘り、ルリーはなにかに思いふけていた。スコップは二つあるのでルリーも掘ることはできたのだが、ルリーは考え事をしたいといい掘ることをしなかった。

グリラル団の権限はどちらかといえばルリーにある。彼女は常に冷静で冷徹なときもある。逆にグランはそこまで冷静ではなくまた冷徹でもないという、ルリーとはまったく逆の性格なのだ。そんな彼はルリーの意見に対しあまり反論することができなかつたりするのである。

カチン。突如と何か硬いものにぶつかる音が廃坑に響いた。それはまるで銀を落としたときのような音だった。

グランはぶつかったところを手で探り、その手に地図が書かれた石版があった。その石版がルリーの目にも入ると両者の石版の輝きが消え、元の色へと戻った。

その石版と持っていた石版をルリーは組み合わせると、そこにで

きた地図をルリーは確認していた。そして、数分後に彼女は言った。  
「どうやらアイテン島から北にある島を新しい石版は指しているよ  
うね」

「この島から北にある島といったら 確かゲチトキ島じゃないか  
？」記憶を取り出しながらグランは言った。

「そうゲチトキ島。今度はそこに石版が待っているわ。一步一步順  
調にことが進んでいくわね」

町に彼らが戻るとなにやら騒がしかった。しかし、それを見るつ  
もりは彼らにはなかった。なぜなら石版を運ばねばならないし、落  
として割ったりしてしまつたら大変なことになるからだ。パズルマ  
ップはピースすべてが集まつてこそ意味があるのだ。

しかし、グランはその騒がしさに興味を引かれていた。

「なあ、ルリー。何をやってているかぐらいはみたくないか？」

「船に運んでからなら好きにしないさ。でも運ぶまではダメよ」

グランはため息をついた。彼は好奇心が強いからか騒ぎがどうし  
ても気になるのだ。好奇心が強いからこそトレジャーハンターと  
いうギート島では批判されるべきことをしているのだから。

そんな騒ぎの内容を気にしつつも石版を厳重に船まで運んだグラ  
ン。船に石版と隠し入れるとグランは体を町のほうへ向けた。

「グラン、騒ぎなんかに巻き込まれないように気をつけなさいよ

明日すぐ出港するんだからね」

「わかつてるよ」

と、その時、彼らの方へ誰かが走ってきているのがグランには認  
められた。そして、その後ろから警官と思われる人物が続いている。  
この光景を見てグランは前に走っている者が騒ぎの犯人であること  
を理解した。

「わりい、ルリー。騒ぎにこれは巻き込まれることになる」

グランはそういうと前に走り出し、逃げてきている犯人にタック  
ルを食らわせた。と思われたが、グランのタックルは華麗にかわ  
されてしまいグランはこけてしまった。犯人はグランを追い越しグ

リラル団の船に近づいてきていた。そんな様子に気づいたルリーは船から出、先ほどのスコップを取り出し犯人に攻撃を仕掛けた。すると見事に犯人はその場に倒れてしまい、後から来た警官たちにあつというまに捕まえられてしまった。

「これほどのものもかわせないのに悪いことをするなんて馬鹿みたい」ルリーはき捨てた。

「なんだと！ グッ」犯人は反論をしようとしたが、スコップで攻撃された犯人は反論することさえできなかった。

そのうちに後を追ってきた警官たちがその犯人を取り押さえ、グランモルリーのところへ戻ってきた。

「ルリー、大丈夫か？」

「大丈夫に決まってるでしょ」

「パズルも？」

「ええ、大丈夫よ。もともと船の中に入れてあるわけだしね」

犯人は連行され、余った一人の警官が挨拶と乱暴行為はできる限りさけてほしかったと要望を言い残して去っていった。

翌日の朝の天候はよく、風向きもベストの状態だった。彼らは帆をはり出航の準備へと取り掛かった。準備が終わりもう出港するといつときに、昨日最後に会話をした警官が二人の前にやってきて、ふほうを伝えた。

「昨日の犯人ですがいとも簡単に逃げられてしまいました。せっかくご協力いただいたのに申し訳ないです」

二人は警官を慰め、自分たちは出港することを告げアイテン島を後にした。

### 第03話 「遺跡の光」

ゲチトキ島到着まではアイテン島に向かうときよりも楽だった。波は穏やかで風は強く吹いていた。しかし、ギート島からアイテン島へ行くよりも距離があつたので時間はたつぷり六時間は使ってしまった。しかしその船旅はとても楽しいものとなった。

ゲチトキ島はアイテン島より大きな島でワイト諸島で一番大きい島だとも言われている。主に商業が盛んな島であるため、漁業はあまり栄えていないので港にほとんど船は止まっていない。見たことのない船が止まっていると島民は当たり前のようにわかるほどである。見たことのない船の乗組員は島民に歓迎されないことでも有名であり、実際グランたちが到着したときにも白い目でみられた。

「チツ、またよそ者が来たのかよ」

島民の声からその言葉がグランの耳に入った。だが、グランたちはそんな言葉は聴かなかつたようなふりをし、船の中で今度はどこに石版があるかを相談した。アイテン島とは違い山はなくほとんどが市街地となっているこの島に隠せるような場所はほとんどなかった。

「でも、唯一隠せそうな場所があるわ」とルリーはグランに言った。「ほら、島の中心部から遺跡があるじゃない。遺跡だったらありそうな気がしない？」

「確かにするな」とグランは同意した。「じゃあ、ここに行くか」かつてのワイト諸島では島一個を我が領土としていた。その時代にゲチトキ島はワイト諸島の中で一番大きい国だったという。そんなこともあつて島には遺跡があり、今なおその形は多少崩れているものの残されている。遺跡は風雨にさらされ色が肌色のどよんだものになっていた。それは快晴の空とはま逆の色であった。

ゲチトキ遺跡はゲチトキ島の観光名所でもあり、一部だけなら内部を見学することもできる。グランたちは一般の観光者と共に内部

へ入り石版が光る場所を探した。内部は暗く一組に二本の木をもらい一本の木には火をつけたいまつにした。

「一本目が燃えきりそうでしたら二本目に火を移して使ってください。それと、燃えきった木はちゃんとここまで持ってきてくださいね。最近じゃ遺跡内に捨てて行くやからがいますので」と入り口の受付員は言っていた。

「ああ、ここからは通行禁止か」

二人が歩いて行くとそこには柵ができており通行禁止　折り返し地点という張り紙が貼ってあった　となっていた。一般客が遺跡をみるのはここまでなのだ。道はさらに奥へと続いている。

「どうする？　石版は光ってるか？」グランはルリーに訊いた。

「光ってないわ」とルリーは答えた。「でも、ちょっと明るくなつた感じかな。もしかしたら反応してるのかも。このまま奥に行ったらありそうな雰囲気ね」

「でも、通行禁止　」

ルリーはグランの言葉をさえぎっていった。

「とにかく、石版を探し出しましょ。通行禁止だろうがなんだろうが私たちの目的はそれなんですもの」

ルリーは柵についているドアのノブを引っ張った。が、予想通り鍵がかかっていたがグランはポケットから針金を取り出し鍵を簡単に壊した。彼はピッキングが得意なのだ。宝箱にかかっている鍵なども彼の手にかければいくら難しいものでも一分であけられる。

奥はさらに暗くなつておりたいまつのみかりだけだと頼りがたい状況になっていた。しかし、二本目のたいまつを作るつもりは彼らにはなかった。どれだけ奥に続いているかがわからないため、明かりは大切にしなければならなかったからだ。

「どうやら」一本目のたいまつがもう少しでなくなり二本目に火を移そうとそろそろグランが考えていたときルリーはいった。「たいまつのはもういらなそうね」

「どうということだ？」

「ほら、これを見ればわかるでしょ」

ルリーはそういうと石版を取り出した。石版が明るく輝いていた。アイテン島の廃坑で輝いたときと同じ　いや、さらに輝きは強くなっていた。その輝きはいまつの明かりよりも強くないまつはいらない状態だった。

「とりあえず二本目に火は移しておいたほうがいいわね。石版をみつけてしまえば輝きは消えるわけだし、その後は明かりがいるからね」

奥に進めば進むほど石版の輝きは強さを増していった。そして、二手に分かれる分かれ道が彼らの前に現れた。ルリーは両方に石版をかざし左手の道により強い輝きを放ったのを感じ左に道を行くことに決めた。

「右側は何があるんだろうね？」と、気になったグランはルリーに訊いた。

「おおかた遺跡の管理をしている人たちの休憩部屋じゃないの。立ち入り禁止ってことはそこから先は業務員だけが入っていいということなんだろうし」

「もしかしたら、怪物が出るのかもしれないじゃないか」

「まあそれもありうるわね、この遺跡だし。でも、鍵がかかっていて使われている様子も合ったわけだし誰かが中に入っていることは確かだと思うわ。とにかく右の道なんて気にしないでさっさと石版探しておさらばしましょうよ　この遺跡と島をね！」

さらに奥へ進むと闇は暗くなる一方で輝きは強さをまし、光と闇が比例関係になっていった。そして、もう一つ比例関係になっていることがあり、それは二本目のたいまつがもうあと半分しか残っていないことだった。時間と共にたいまつが燃え尽きてゆく……。

しばらく進むとそこは行き止まりになっていた。彼らはまさにここに石版があると瞬時に察した。アイテン島のときと同じなのだ。石版の輝きは直視できないほどになっている。ここで間違いない。しかし、アイテン島と違うのはそこまで石造りで穴を掘るなんてこ

とはできないことだった。

「ちよつとこの辺を調べてみましょうかね。隠しスイッチとかで奥に通路が隠されてるのかも」

まさにルリーのその読みはあたっていた。通常足を置くことがほとんどない隅に小さい突起があった。それを発見したルリーは突起を押してみると、行き止まりと思われていた壁が下に下がって行き、奥には台座に乗っている石版が彼らの目の前に現れた。

「ふふ、ちよろいものね。パズルマップといえど私にかかれたいしたことはないのよ。さあ、グラン。とつと石版をもつてこの遺跡からでましょう」

グランは石版を手に入れ、ルリーに渡そうとしたがルリーはそれを受け取らなかった。

「なんでだよ？」グランはちよつとむつとした声で言った。

「だってほら、この二つの石版はまだ輝き続けているのよ。アイテン島では石版をみたら輝きがなくなってしまったのに。もうたいまつ火もほとんどないことだし、この際この輝きに頼るしかないでしょ。だから、輝きが失われていないこの状態を維持しておくわけ。輝きがいらなくなったらその石版とくつつけるけどね」

ルリーのその読みは正しかった。遺跡を出るまでの道のりで石版の輝きは失われず、外に出て手に入れた石版をくつつけると石版の輝きは消えてしまったのだ。パズルマップがもたらす宝はすばらしいものであるというが、この石版こそすばらしい宝なのではないかと疑いたくなるほどだ。

この日の遺跡探検はこれで終わりを向かえ、次の日に出港することになった。なぜならば外に出たときは日が暮れていたし、次の目的地となるノイスト島にはゲチトキ島から八十マイルも離れた場所にあるのだから出港することはできない。夜の海は穏やかではあるが危険でもあるのだ。それはトレージャーハンターである彼らがよく知ってることだった。

だが、彼らが知らない危険がこの夜には起こった。



「失礼だが」就寝をしようとしていたグランとルリーの船に誰かが話しかけてきた。「あなた方は昨日アイテン島にいらしたかね？」

「いきましたよ」グランは答えた。「どちらさんですか？」

「おれか？ おれはな 昨日つかまりそうになった泥棒だよ！」

その泥棒はそういうと船に何かの煙をばら撒いた。その煙を吸ってしまったグランとルリーは気を失いその場に倒れこんでしまった。

「さて、これで我々に――」

泥棒はそういうと口をつぐんだ。余計な事はどこであろうと言わない。そう教え込まれていた。

## 第04話 「狭い空間」

グランが目を覚ますとそこは見知らぬ場所 部屋だった。古い今にも崩れそうなレンガでできている壁にろうそくの火が上のほうに灯っている。真正面を見ると通路ができていて、そこにも同じ壁とろうそくが灯されている。光はその二つしかその部屋には流れ込まず暗闇に近かった。部屋と通路の間には鉄格子がはめられており、部屋から勝手に出ることはできないようになっていた。

「おいおい」鉄格子を見るとグランはつぶやいた。「なんでおれは牢屋に閉じ込められなきゃならないんだよ」

グランは辺りを見回した。ルリーの姿がない。別の牢屋に閉じ込められているのだろうか ? グランは鉄格子を握り可能な限り廊下を見渡した。

廊下に牢屋と思われる場所の前だけにろうそくが灯されていた。全部でろうそくは四本で左のほうに階段が見えるため左が出口らしい。階段の近くには机と椅子があり、椅子には見張りと思われる人物が座っている。なにやら本を見ているがどうも理解しがたいような内容なのか首をかしげている。

右手にはろうそくは一本しかなく、すぐに行き止まりとなっているのがわかった。つまり出口となるのはあの階段のみであることがわかった。

「さあて、どうしようかな」

牢屋の隅にある古いつぎはぎの毛布一枚しかないベッドに座るとグランはここからどうやって脱出するかを考えた。今持っているのは煙幕をはるときに使う煙花火と針金だった。グランは後者をみて思わず顔がにやけた。

針金があれば鍵をあけるのはたやすいな。

ピッキングの名人とルリーの証されている彼はその仕事に自身と誇りを持っている。鉄格子と同じになっているドアの鍵をグランは

チヨチヨイのチヨイで壊してしまった。

「どんなもんだい。さて、ここからが問題だ」

グランは普段から武器を持ち歩くことはしない。武器を持って入ればグラン得意の俊敏な動きの邪魔になることがあるからである。危険にあったときは煙花火を揚げ、相手を目くらましさせているうちに逃げ出すということにしている。それに、もともと危険な目にあうときはルリーと一緒になので彼女の魔法に頼ってさえいればいいのだ。

だが、この場ではルリーはいない。それに相手も遠くにいるから煙で目くらましさせる前に他の仲間を連れられてきてしまう。敵に近づき階段を封鎖した上で見張りを何とかしなければならぬのだ。敵に近づくといいど、気づかれずに近づくのは無理な距離であったし気づかれても急いで近づけば間にあうかもしれないがリスクが高すぎた。

すると、突如隣の牢屋の前にあるろうそくの火が消えた。そこが消えただけで隣の部屋の辺りは真っ暗になった。それに気づいたのか、見張りは机の引き出しからろうそくを一本取り出してこちらに近づいてきた。だが、ろうそくの火が消えたのはろうそくがなくなつたのではないことにグランは気づいていた。グランがいる場所からならろうそくの火が消えたただだとすぐわかるのだ。

そうとも知らず見張りは一番最初の燃えているろうそくから火を移しそれをもって近づいてくる。グランの胸はドキドキし始めた。

このときグランは一つの脱出案を考えていたのだ。

コツコツコツ……。見張りがあるく音がどんどん近づいてくる。

そして、グランの牢屋の前に見張りが来たときグランは煙花火を見張りの持っているろうそくに向かって投げつけた。

すると突如煙があたりを充滿し始めた。グランは急いで牢屋から出て右側の牢屋に向かい、その牢屋の鍵を壊した。

「あなたならわかってくれると思ったわ」牢屋から現れたルリーは言った。

「さあさあ、そんなことはどうでもいいから見張りを何とかしてくれよ。煙が晴れたら脱走したってばれちゃうからね」

ルリーはスコップを取り出し巨大化させ、風の魔法で煙を吹き飛ばした。煙がなくなり見張りを見つけるとルリーは巨大化させたスコップで見張りの頭を殴った。見張りはその場に倒れこんだが、息はしており気絶した状態になった。

「これでどう？」ルリーは自慢げに言った。

「ありがとう、ルリー。さすがだよ。あのろうそくの火を風の魔法で消すというアイデアも最高だった」グランは消えたるうそくをチラッと見た。

「あなたが鍵を壊すときのカチャカチャという小さい音を聞いたからこれをしたのよ。あなたの持ち物はおおよそわかってたし、その持ち物がなくなってもなんの危険性もないものね。まあ、なんて私たちは運がいいのかしらね！それにあなたのその頭の回転もよかったわ！」

「おれも捨てたもんじゃないだろ？」グランはちよつと自慢げに言った。「だからおれにも少し発言権を」

グランがその先を言う前にルリーは「ダメに決まってるでしょ」といいさえぎった。

「さあ、そんなことより早くここを出しようよ。私気づいたことがあるのよ」

「気づいたこと？」

「ええ。あなたの持ち物は何も取られていなかったのはさっきのでわかったけど、私の持ち物も一つを除いてちゃんと残ってるのよ。その一つがね　パズルマップなのよ！」

「なんだって！」グランは思わず叫び声を上げてしまった。

「静かにしなさいよ。まだ私たちの安全が確保されたわけじゃないんだからね」

「ああ、わりい。それよりどういうことだよ、パズルマップがなくなっただけだ」

「おそらく最初からあれが目的だったみたいね。まあ、あの泥棒一人の計画ではないんでしょうけど」

「どうしてだよ？」グランは不思議そうに訊いた。

「あなたわからないの？ やっぱ発言権はあげられないわね。よく考えてみなさいよ、この場所を。泥棒がこんな牢屋を持っていると思っっているわけ？ むしろ泥棒もここにつかまった感じじゃないでも、私たちがこれだけ騒ぎを起こしているのに牢屋から誰も出てこないということは誰もいないのよ。そうしたら泥棒が捕まって私たちもおまけで捕まったってことはないわけよ

そうしたらここは泥棒がこんなところを持っているわけないんだから裏で別の人たちがパズルマップをほしがっていてあの泥棒に盗むよう指示したという感じがしらね」

その説明にグランは思わず称賛の拍手をあげた。

「すごいね、ルリー。君はトレジャーハンターじゃなくて探偵としてやっていけるんじゃないか？」

「あなたの頭が鈍いだけよ」ルリーはそっけなく言った。「さあ、それより早く行くわよ。なんだか結局長話して時間を無駄にしちゃったしね」

彼らは急いで階段へと向かった。だが、その中で牢屋の中を少しみてみたがやはり牢屋には誰もいなかった。いや、白骨体ならばあった。

階段に到着すると不意にルリーの目に本が映った。ルリーはその本を手に取りぱらぱらとめくっていた。

「何をしてるんだよ？ その本になんか書かれてるのか？」

「書かれていることには書かれているんだけど読めないわね……。私たちの言葉でもなく世界中のどこにでも使われていなそうな文字

昔の人々が使っていた文字かしらね」

「読めないなら早く行こうぜ」グランはせかした。

「でも、読める箇所が一部あるのよ。『魔法』ってね」

「魔法？　じゃあ、それは魔法を覚えるための書物ってこと？」

「かもしれないわね。まあ、これはとりあえず持つて行くことにしましょう。もしかしたら何かの役に立つかもしれないし」

## 第05話 「船の問題」

ルリーはそれを小さくしポケットにしまい、階段を上って行った。階段は螺旋階段で、とても長いものだ。最低でも五分は走りのぼりやつと外へ出るためのドアのところまでやってきた。ルリーはそのドアに耳を近づけ、外の様子を伺った。音は何も聞こえない。どうやら誰もいないらしい。

ゆっくりとドアを開けると、そこは牢屋の廊下と同じ雰囲気の廊下だったが、違ったのが夜の暗い海が見えたことだった。ルリーとグランはできる限り音を立てずに廊下へと出て進んで行った。廊下は緩やかなカーブを描いていた。その途中には武器庫や貯蔵庫などさまざまな名札のついた部屋があった。先頭はルリーで何かを探すように歩いていた。見張りと思われる敵の兵士がやっていると近くにあった部屋に入り込み、近くになかったら完全に後戻りして部屋に入るというあまり進めぬ方法で進んでいた。

「何で早く出ないのさ？」ある部屋に隠れたときグランはルリーに訊いた。「この部屋からなら下におりるのぐらい余裕の場所だぞ」

彼らがいまいる二階の部屋は、窓をおりた下には茂みがありクツシヨンになって助かることは簡単だった。もともと、彼らが出た場所は一階であつたから、こんなことをしなくても済んだのだが。

「あなたパズルマップを取られたままにする気？」ルリーはあきれた声で言った。「もちろん、私は取り返すつもりよ。だから、こうして歩き回ってるんじゃないの」

「そうか、そうだったな」グランは申し訳なそうに言った。「あれがないとここまで来た意味がないし、これからどうしようもなくなるな」

「わかったら、行きましょう。もう見張りはここをとおりこしてるでしょうからね」

内部を歩いていて二人が感じたのはこの家は城なのではないだろ

うかということだった。建物は三階までしかないが、このフロアはとても広く端から端まで歩いたら七分ほどの距離がある。二人は慎重にかつ隠れながら進んでいるためフロアにある場所をすべて回るのに三十分以上かかっていた。

一階にも二階にもパズルマップはなかったので彼らは三階へとあがった。三階は他のフロアと同じなのだが少しばかり内装がきれいになっている。壁は真っ白で汚れ一つさえない。太陽の陽を浴びればきらきら輝きそうなのだ。部屋数は少なかったが、彼らはそれを喜び三階を見て回った。

「あら？　ここみたいね」

ルリーは『重要物保管室』と書かれた札がついているドアを発見した。ドアに鍵はかかっていたので、グランはそれを壊し中へと進入した。

中はガラスケースに入れられてなにやら高級そうなお宝が並べてあった。短刀や金のトロフィー、美しい絵皿、磁器……。だが、彼らはそれには目もくれずパズルマップを求めてガラスケースを見て回ったが、パズルマップはなかった。

「よく考えれば」と見終わるとグランは言った。「あんな汚いものをガラスケースに入れるとは思えないな」

「確かに」ルリーは同意した。「パズルマップ同士が近づいたときはきれいだね。あら？」

部屋の隅に小さいたんすがあるのをルリーは発見した。そのたんすは三段になっており、一段だけ鍵がかかっていた。ルリーはさかさずグランにピッキングをさせ中をのぞくとそこにはパズルマップがおいてあった。ピースも無事三つあるし、地図はよめるようになっていた。

「これでもう帰れるな」グランは安堵のため息をついた。

「そうね。でも、もう一つ問題があるのよね」

「なんだい？　もう一つって？」

「いや、それはここで話すのはやめましょう。ここは別の人が来そ



うな雰囲気だから。もつと安全なところだね」

その“人が来そうな雰囲気”は見事に的中した。グランたちが部屋を出ようとするや廊下側からドアが開きグランにそのドアがぶつかった。廊下側には兵士がおり、二人を見るや否や剣を抜き出しかみんりのように耳障りな大声で不審者がいることを告げた。

「やばい！」

「グラン！ 煙花火を！」

ルリーの指示に従いグランは相手が剣で切りつけてくる前にその場を逃れ煙花火を放ち相手の視界をさえぎった。しかし、大声に気づいた別の兵士がやってきていた。だが、幸いなことに相手は一方側から来ていないので彼らは反対側に逃げ出すことができた。

「どうするよ、ルリー？」走りながらグランは訊いた。「このまま一階に戻れると思うか？」

「無理だと思っわ」ルリーはそっけなく言った。「どうしましょう？ 船の問題もあるというのに……」

「船の問題？」

「さっきの問題っていうのが、この島を出る船なのよ。ここがなんて島かは知らないけど、ここにずっといると危険だから早く出たいのよ。でも、私たちの船がここに来ている保障はないのよ。あつたらそれで問題ないけどなかったら脱出手段がないわ」

「でも」ここで二階へと続く階段に足をかけた。「相手の船があるじゃないか。それを盗めば行けるんじゃないか？」

「それがあるとは思っただけど大型船じゃ困るのよね。私の力じゃ動かせないわ」

一階への階段に足をかけると下から別の敵が上ってくるのが二人にはわかった。かといって上に戻っても敵は来ているため、彼らは二階フロアの別階段へと向かった。しかし、そっちの別階段側からも敵がやってきており敵に挟まれる格好となってしまった。

「ルリー、こっちだ！」

はさまれる間にある部屋にグランたちは入り中から鍵をかけた。

廊下から不審者はどこへ行ったという会話がなされているのが彼らにはわかった。

「どうするのよ」ルリーは怒った調子で言った。「これじゃもう逃げ場はないじゃないの!」

「よく辺りを見回してみよ、ルリー。この部屋はおれがパズルマップについて聞いたところだよ」

確かにその部屋はルリーがグランにパズルマップについて教えた場所だった。グランは続けた。

「あの時、あの窓から下に降りれそうだったんだ。そこから降りれば大丈夫さ」

「まあ! あなたがここまで考えていたなんて。でも、助かったわね。さ、急いで降りましょう、外の会話がこのドアに向けられているわ」

まずルリーが降りようとしたとき、ドアをたたく音がした。ルリーはその音を聞きはつと後ろを振りむいたが、グランが早く行くようにせかしたのですぐに下へと降りた。下にある茂みのおかげで彼女はかすり傷程度しかなかった。

次にグランが降りようとしたとき、ドアはバタン! という音と共に敵が中へ入ってきた。皆、剣をこちらへ向けている。

「これはこれは団体様のお出ましですか」グランはいやみつたらしく言った。「おれに何のようだね?」

「だまれ!」一人の兵士が怒鳴った。「おとなしくこっちに来てもらおうか、不審者め。それとあの部屋で盗んだものを返してもらおう」

「盗んだものねえ」グランはあきれたように言った。「それはどっちが盗んだものかな」

「なんだと! ごちゃごちゃしていませんとおとなしくこちらへ来い。そうすれば手荒なまねはしない」

「悪いがそちらに行くつもりはないよ。それでは哀れな兵士たちよ、さようなら!」

グランは再度煙花火を投げ、下の茂みの中へと落ちていった。彼もルリーと同様かすり傷ですんだ。

二人は追ってがこないうちに海岸へと出た。船はそこから西にとまっており、それほど大きくはない。せいぜい中型の船だった。その中型船を動かすのにルリーは風の魔法を最大限にしてやっとまともなスピードが出るほどだったので、ルリーは大変なおもいをしてついに離島することができたのである。

遠く離れた場所から見たその島には城らしき大きな建物があった。

## 第06話 「巨大な影」

羅針盤の指す北へとグランとルリーは船を移動させていた。

謎の相手に捕まり牢屋に入れられた島がどこにあるかがわからな  
いため、彼らはどこに行けばいいのかがわからなかった。北へ進ん  
で行っているのはただ単に風が北へと吹いているからだだった。そう  
すれば帆船はすばやく動けるわけだし、ルリーも樂することができ  
たのだ。

「でもなあ、ルリー。ゲチトキ島から北に行くとワイト諸島から抜  
け出しちまうよ。ゲチトキ島だったなら南に行かなきゃ」

「馬鹿ね」ルリーはあきれたように言った。「あんな城みたいな場  
所がゲチトキ島にはなかったはずよ。だから、あそこはゲチトキ島  
じゃない」

「じゃあ、ノイスト島じゃないのか？ あそこから北へ行ってもワ  
イト諸島から抜け出すことになるよ。ノイスト島だったら北東に行  
くとイリスの国があるはずだから北東に進んだほうがいいかもしれ  
ないな」

「あなた、北へ行ったらワイト諸島から抜け出してしまふ島ばかり  
言うのね。別に誰も北へ行ったらワイト諸島から抜け出す島があそ  
こだとは一言も言っていないのに。もしギート島で私たちが捕まって  
今のような状況になって南に逃げ出したら、同じことをいうんでし  
ようね。あら？」

ルリーは遠くに雷が光っている場所を認めた。それはしばらくし  
てから再度光、グランもそれを確認した。

「北は嵐のようね。このままじゃ突っ込んだんじゃうから北東か北西に  
逃げるしかないわね。どっちにいかうかしら？」

「やっぱり北東だろ」グランは即答した。「もしゲチトキ島やノイ  
スト島だったら北東に行けばイリスの国が待ってるんだしな」

「あなたはイリスに行きたいわけ？」

「別にそういうわけじゃないけど、北東に行けばイリスがあるのはわかってるわけだからさ」

「私はゲチトキ島でもノイスト島でもないと思うけどね。まあいいわ。北東にしましょ」

北東に進路を取ったグリラル団の仮船はきれいに嵐を通り越して行った。と思われた。が、実際は違い進路を変更したときからの領海のあるものに取り込まれていた。

それに気づいたのはグランだった。船は北東に動かしているのに羅針盤の針は進行方向と同じ向きになっている。グランは何度も舵を北東に戻したがそのたびに船は北へと戻って行く。

そのことをルリーに告げるとルリーは驚いたように言った。

「そんな馬鹿な！ちゃんと舵をきってるんでしょね？」

「ああ。それなのに北へと戻って行くんだ」

ルリーは急いで船の後ろに行き、風の魔法で北東の風を作り出した。それにより船は多少曲がったが、やはり北より北北東だった。

「どうやら」とグランは舵を思いっきりきりながらつぶやいた。「

渦潮が何かに巻き込まれたみたいだな」

「渦潮……」

ルリーは船の下を覗き込んだ。特に渦潮が発生しているような様子は無いが、何か知らないものを落としてみるとそのものはちゃんと北へと流れて行った。渦潮というより流れである。

ルリーはそのことをグランに告げた。

「それだったらまだ助かりそうだぜ」

「本当？ だったら早くしなさいよ。私もできる限り協力するから」  
「だったら、南東に向かって風を吹かせてくれ。もちろん帆にだ」

ルリーは言われたとおりにそれを実行した。グランはそれと同時に思いっきり舵をきった。その舵は重たいものであったが、船は完全に東を向き船は流れから脱出することができた。それでも時々北よりになりがちだったのだが、それは本流から外れた場所だったた

め舵だけで抜け出すことはできた。こうして、悪魔のシナリオへと続く流れから抜け出すことができた。

「もう大丈夫みたいだな」流れから抜け出すとグランは言った。

「ええ。それにしてもさっきの流れの場所はなんだったのかしら？

あんなにすごい流れは初めて見たわ」

「あそこはワイト諸島で一番危険な島だといわれている、ワール島だとおれは思うよ」

「ワール島？ あの時も嵐で囲まれていて島の周りには巨大な渦潮ができていて近づいたら抜け出せなくなるって言うあの？」

「だと思っ。まあ頼もしいことにルリーの風の魔法があつたから抜け出すことはできたけどな」

「確かワール島はワイト諸島の中心部に位置するところにあるのよね？」ルリーは思い出すように言った。「私たちは北東に進んできたわけだから私たちが捕まっていたのはアイテン島ということになるわね。でもアイテン島にあんな場所あつたかしら？」

「なかったと思うけどなあ。それにアイテン島とは島の大きさも違つたよ」

「じゃあ一体どこだったのかしら？」

「とりあえずどっちに行くかを決めよう さっきからずっと北東に進んだままでけど本当にこれでいいのか」

「次の目的地のノイスト島はワール島の北東にあるからちようどいと思うわ。南東に行つてギート島に戻つてもしかたないしね。あら？」

ルリーは明かりもなく真っ暗な遠くのほうに島があるのを発見した。それは北東方向にあり、ノイスト島ではないかとグランにいった。

「でも、ノイスト島に到着するには早すぎると思うけど？」と、グランはいった。

「もうこの際なんでもいいじゃない。私は早く眠りたいわ」ルリーはあくびをしながら言った。

「じゃあ、何か」ルリーの言葉を聞いたグランは言った。「あの島で船をとめて休もうってことか？」

「そうそう」ルリーはうれしそうにいった。「話がわかってるじゃない、グラン」

「でも、ノイスト島に早く行ったほうがいいんじゃないか？ あいつらは一回石版を手にしてるから次の石版の場所は知ってるはずなんだぜ？」

「よく考えてもみなさいよ。グランのいうとおりなら、ノイスト島で休むのは危険だと思わないの？ あいつらがいるんだったらノイスト島じゃない安全な島で休んだほうがいいじゃない。あの島はノイスト島にしては小さいようだからゆっくり休めそうだし」

島はほとんど近づいていた。遠くから見ても近くでも大して大きさは変わっていないようにグランは思えたが、確かにノイスト島の大きさは違うことだけはわかった。まだ暗いので形しかわからないが。

グランはルリーの提案に賛成し、今夜は名前もわからぬその島で休むことにした。そうと決まるとルリーは風の魔法を使い船のスピードをあげた。

島の港に到着すると、早速ルリーは眠りに入った。布団はなかったものの、ワール島での戦いがあつたし疲れていたからすぐに眠ることができたのだ。だが、グランはそうはいかなかった。彼はまだ警戒心を持ち、船の周りの港をパトロールの意味で散歩をしていた。その散歩中に彼は向こう側から誰かがこちらにやってきていることがわかった。

敵が追ってきたのか？

彼はそう瞬時に察知し、すぐに逃走できる準備をしながら向こうの正体をうかがった。波は穏やかで風はないからか、一步一步コツコツという歩く音が聞こえた。その音が聞こえるたび彼は心がドキドキし始めた。いったい誰がやってきているのか？

「おや、おまえさんこんなところで何をしておるのかね？」

唐突に歩いてきた人が話しかけてきた。その姿はまだ完全に読み取れなかったが、グランと同じくらいの身長の人で、老人であごひげを蓄えていた。グランは逃走体制こそ崩したものの、まだ警戒心が残っていた。

「眠れないので散歩を」とグランは嘘をついた。

「ほうそうか。海風にあたるとよからう。じゃが、今日は風がないようじゃな。珍しいこともおきるものよ。こんな時間に島民でもない人と会うのみな」

「おじいさん、ここはなんという島ですか？」老人の言葉を無視してグランは訊いた。

「クリウム島だよ。だが、なぜそんなことを訊くのかね？」

「いえ、わけもわからずここに止まったものですからどこの島かわからなかったんですよ」

「そうかそうか。それは大変じゃな」老人は悲しそうに言った。「どれ船の破損状況でも見せてもらおうかのう？」

その言葉にグランは驚き、老人に船が壊れたのではないことを告げた。

「なんじゃ、壊れたわけではないのか」

「ええ、すいません、表現が悪くて」

「いいや、いいんじゃないんじゃない。こつちが勝手に間違った解釈をしたまで。では、わしゃこれで」

老人はそういうとグランがやってきたほうへと歩いて行った。

グランはというと、この島がノイスト島の南西にあるクリウム島であることを知り安心した気持ちと不安な気持ちが入り混じったような感覚に見舞われていた。ノイスト島でないから敵はいないだろうが、ノイスト島に近いと敵がこちらの島にいるとも考えられる。グランは警戒心が解けず、このまま散歩を続けようとしたが眠気に襲われ始めたため、仕方なく船に戻り就寝することにした。

グランの警戒心は何の意味もなかったことが翌朝になってわかった。グランはルリーより早く起床したが、船はクリウム島に止まっ



たままだし猿ぐつわをかまされたりもしてない。パズルマップもとられていなかった。

この日の波も穏やかで、ルリーがおきるとすぐに出港準備に取り掛かった。風は北風だったため、少しの間時間を置いておくと西風が変わっていた。西風になるとすばやく彼らは出向し、ルリーの魔法をメインに北へと進みノイスト島へと向かった。

その船の出港を一人の老人はじっと見つめていた。すると老人は船に、剣が青いジョリー・ロージャーがついているのを見て、驚いた。

「奴らがこの島に来るとは……」老人はつぶやいた。「なにやら嫌なことが起こりそうじゃな」

## 第07話 「入り江の仕掛け」

ノイスト島までの道のりはたいしたことなくすんなりと到着することができた。

ノイスト島はワイト諸島で一番北にある島で、ノイスト島からさらに北東にある大陸との貿易が盛んな島である。そのため、港は活気付いており船もたくさん泊まっている。島はほとんどが市街地で自然というものは縁のない島である。そのため、グランとルリーはパズルマップがどこにあるものか悩まなければならなかった。

結局、話がつかなかった二人は島の案内所へ行き何か自然のもので有名なものはないかと尋ねた。

「でしたら入り江がいいのではないかと思います」

現在彼らがいる島の場所の反対側も市街地になっているのだが、そこでは貿易が行われておらず綺麗な入り江があるのだという。

「そこには洞窟があるので入らないようにしてくださいね。その洞窟はなぜか酸素が足りなくて酸欠で倒れる人が多いので」

案内所を出て船に戻っているときにルリーはいった。

「入り江の洞窟か。今回のパズルマップはそこにあるみたいね」

「たぶんそうだろうけど、酸素がなかったらおれらも参っちゃうよ」

グランは気が乗らない様子でいった。

「大丈夫。私に考えはあるわ」

グランはその考えが何かをずっと尋ねたが、ルリーは教えてくれず入り江のところまで口を割らなかった。

入り江のはずれにその洞窟はあった。ピチヨピチヨと水が滴る音が響いていた。奥の道は真っ暗で何も見えないが直線になっているように思えた。

「で、ルリー。いったいどうしようっていうんだ？」

「これに火をつけるのよ」ルリーはさういうと木を取り出し火をつけ、たいまつを作った。「火は酸素がないとつかないから酸素が著

しく低いところに行けば火は消えるわ。そうなったら私たちも危険  
つてことがわかるでしょ」

中は意外と広くなっており二人並んで進むのは余裕だった。しか  
し、歩い程度進んだと思ったら突如として道が狭くなっている箇所  
が二人の目の前に現れた。その箇所は二人並んで歩くどころか一人  
で歩くしかない広さしかなかった。その道をルリーは先にあるこう  
とすると、突如たいまつ火が消えた。

「どうやら」とルリーは広い場所に帰ってから言った。「今の場所  
から酸素がない場所のようね。そして、奥には絶対に何かがある」  
「どうしてそんなことがわかるんだよ？」

「この広い場所から唐突に小さい道になることが一点目。ここから  
先は進まないでほしいから小さい道にしよう。そして、酸  
素がなくなっているのが二点目。酸素がなければ人間は通ることが  
できないわ。つまり、あの道は二重のブロックができてるわけ。そ  
うなったら、絶対に何かがあると思わない？」

「確かにそれだと何かありそうだな」グランは同意した。「でも、  
どうする？ これじゃ進むことができないぞ」

そういわれると、ルリーはパズルマップを取り出してみた。パズ  
ルマップがかすかに輝いていた。

その輝きを見たルリーはもしかしたらと感じ、パズルマップをも  
って小さな道へと進んだ。ルリーは普段と変わらない呼吸を繰り返  
し奥へと進めそうな気がした。

その姿を見たグランは心配そうに訊いた。

「だ、大丈夫なのかルリー？」

「ええ、大丈夫みたい。あなたもちよつと来てみたら？」

グランもそれに従い小さな道に入ると、やはり酸素が足りない感  
じがし、元の道へとすぐに引き返した。

「どうやら、パズルマップを持っていないとダメみたいね」その様  
子をみたルリーは言った。

「だな。ルリー、おれが変わって奥に行くよ。一人じゃ危ないだろ

？」

「いえ、いいわ。私だけでも大丈夫そうだから私が行く。グランはそこまで待つて」

奥へとルリーが進んで行くとまた広い道　いや部屋が現れた。その部屋は明るく太陽の陽が差し込んでおり、部屋の中央にある台座を照らしていた。その台座の上には石版のかけらが一個安置されていた。

ルリーは喜びながらその石版のかけらを手にすると、持っていた石版にくっつけた。すると、石版は完成したと思われた　が実際は違い四方のみが完成され、真ん中だけが抜けていた。だが、真ん中の石版がある場所は示されていた。その場所は　。

「フィスト島……か」

フィスト島。それはギート島の近くにある島で、何かと悪評が飛び交う島。ギート島の人間はその場所に行くことは絶対になく敬遠していた。そんな悪評高い島に行かなければならないと嫌な気持ちを胸にひめ、元の広い道へと彼女は戻った。

グランと再会しそのことを話すとグランは言った。

「フィスト島なんか行きたくないなあ……。あの島は何かと嫌なイメージしかないし、ごろつきばかりいるとかい噂じゃなか」

「確かに。でもここまで来たんだし行くしかないでしょ。これが完成してお宝を手に入れるまであと少しなのよ」

「こら、ここで何をしている」

不意に後ろから声が聞こえたので、後ろを振り返るとそこには十人の警官たちが警防を持っていた。

「なにつてただ話しをしていたのですが」とグランは答えた。

「とりあえず、私たちと共に署にきてもらう。ほら」とその警官はほかの警官に二人を捕らえるように指示を出した。

「チッ、ルリー、いくぞ！」ルリーが軽くうなずくのをみて、グランは煙花火をつけ煙で洞窟を覆った。警官たちはそれにうろたえ、ゴボゴボとせきをしているうちに二人は洞窟から抜け出し、急いで

船へと戻った。船に飛び乗ると警官たちがこちらに向かってきているのを認められた。

それをみてグランは言った。

「なんで、この船がおれらのだつてわかつてるんだよ」

「どうでもいいから、早く出しちゃっつわよ。そんな話は後にして！」

船がノイスト島から遠ざかると、グランは一時船をとめノイスト島の様子を伺った。ノイスト島から追っ手が来る様子はなく、二人は逃げきることに成功していたようだった。

「いったい、あの警官たちはなんだったんだろう？」グランは言った。「別に危ないという意味だけだったら捕まえようとはしないだろうに」

「としたら、私たちを別の目的で捕まえようとした、としか考えられないわね。でも、いったいどんな目的なのかしら。まさかパズルマップを手にしたことじゃあるまいし」

「とりあえず、考えても答えはでなさそうだしとっとと行くことにするか？ どちらかといえばいきたくはないけど」

「フィスト島か」ルリーはそうつぶやくと、少し考えてから言った。「ねえ、グラン。まずゲチトキ島に行かない？」

グランはその提案にいささか面を食らったようで、聞き返した。

「ゲチトキ島に行つてどうするんだよ？」

「次のフィスト島にはどの道いかなきゃダメなんですよ。だったら、こんな動かしにくい船はよして私たちの船で行ったほうがいいじゃない。この船だと多少目立つようだしね」

グランはすっかり自分の船のことを忘れていた。つかまつてから今まで何かと不安な日々を過ごしていたから船のことなど思い出す暇などなかったのだ。実際、船自体は運転しているしこの船が自分のものでないということすら忘れていた。

自分の船のことを思い出すと、今自分が舵を取っている船をみてどこか自分の船が恋しくなってきた。何年間も共に航海してきいた

船を使わず別の船を使っていたからだ。

「でもおれらの船がまだゲチトキ島にあるかな？ 相手たちが持つて行ってると思うんだけど」グランは疑問に思ったことを口にした。「まあそうかもしれないけど、先にゲチトキ島よ。それでなかったら相手の島にあるわけだし、そこに乗り込めばいいわ。わざわざ先に危険を冒す必要もないでしょ？」

グランはうなずき、船をゲチトキ島の方角 西に向けて、舵をきった。

## 第08話 「青い剣の海賊旗」

ゲチトキ島は歓迎されないことでも有名だが、ノイスト島とゲチトキ島の間の海の気候も彼らに感謝しなかった。風は向かい風。海は大荒れで、中型船ともなると舵を取るのさえ大変だった。この点でもグランは自分の船が恋しくなり、早くゲチトキ島に行きたいという思いがますますつのるのだった。だが、それをさえぎるかのようなこの海は誰かの策略なんじゃないかと思うほどだった。

ノイスト島を出航してからだいぶ時間もたち日が暮れてしまった。しかし、海の荒れはおさまらず、収まったときにはすでに深夜に近い状態だった。二人はノイスト島で少しばかり買った食糧を口にしながらか航海を続けた。

ノイスト島からゲチトキ島まで約八十マイルはあり、占めて十四時間はかかる道のりなのに荒らしのせいでさらに時間をくってしまった。半日分の道のりを進んでよかったものを、十時間分の時間しか進むことができなかった。さすがにねむなってきたグランとルリーはローテーションで船の舵をとることにして、眠ることにした。

そして、無事に到着したときには少し明るみがかっており、朝が来ることを二人に知らせていた。眠っていたグランはルリーにたたき起こされ、寝ぼけた状態でルリーの言葉を聞いた。

「この状況で船があつたら入手するチャンスはあるわ。早く起きなさいよ、グラン！」

グランは起き上がり、すぐに船から二人は出た。朝を知らせる弱い太陽の陽に姿を照らされながら、船をとめた場所へと向かった。直接港にとまってしまうと、目立つのでゲチトキ島の裏にとめたのでしばらく歩いて行き、港に到着した。すると、二人は喜びを感じた。漁船と思われる船と船の間に自分たちの船はちゃんと残っていたのだ。周りにはまだ誰もいないのか波以外の音は何も聞こえなかった。

二人は一気に走り、船に飛び乗った。ルリーは帆をあげ、グランは舵の状態を調べすぐに出向する準備を始めると、突如として両サイドの漁船からランプの明かりが二人の目に入った。グランは船室から出て、あたりを見回すと、そこにはダークブルーの袖なしの服を着て、剣を持っている男たちの集団がいた。

「あなたたちは誰？」ルリーは言った。

「そんなことをいう筋合いはない」と、一番先頭にいる巨漢が言った。おそらくリーダーだろう。「それより、お前たちが持っているパズルマップと我が島から盗み出した本をこちらに渡してもらおうか」

ルリーたちはこの男たちが、自分たちを連れ去った相手だということはずぐにわかった。どうしてもパズルマップを手に入れようとしているこの相手たちは、二人が逃げて必ず行きそうな場所というのがここであると考えて待ち伏せをしていたのだ。

それはいいとして、ルリーに限らず頭の鈍いグランでさえ疑問点があった。相手はパズルマップを必要としているのはわかるが、なぜ、本までいるのだろうか？ この本の読めない部分はパズルマップと関係があるのだろうか？

「おとなしく渡すと思っているの？」ルリーはあえて穏やかに言った。敵意をむき出しにするより、まだ安全だと考えたのだ。

「俺たちに捕まって、牢屋を抜け出し目当ての品を盗み、逃亡したお前たちがおとなしく渡すとは思ってない」と先頭の巨漢は言った。「しかし、できるものなら平和にいいじゃないか。俺たちはお前たちにかまっている暇はない。おとなしくパズルマップと本を渡せば怪我をさせたりはしない」

「その保障はどこから来るのかしら？ それがなければ渡すことなんてできないわ。それに、あなたたちが誰なのかもわからないとね」ルリーは交換条件と引き換えに、相手のさまざまな情報を得ようとたくらみを立てた。もちろん、パズルマップとこの本は渡す気はないから、敵の情報を搾れるだけ搾りとうとうという考えだ。



運が悪いというべきなのか、よいというべきかわからないが、このとき、風は出航するほうから吹いていた　つまり向かい風だった。これが追い風になれば一気に出航でき、逃亡できる。それまで粘らなければならなかった。

「俺たちの正体を知らないのか？」巨漢は少し驚いたように言った。

「お前からこのワイト諸島の人間か？」

「ワイト諸島の人間よ。あなたたちはそんなに有名なの？」

あたりが少しざわめいた。巨漢が話始めると驚いたことにピタッとざわめきが収まった。

「俺たちのことぐらいは知っておいたほうがいいぜ、トレージャーハンターさんたちよお。このワイト諸島を管理しているのはこの俺様たちローレンツなんだからな。青い剣のジョリー・ロージャーが俺たちの目印だ。さあ、そんなことより早くそれを渡してもらおうか」

少しだけが情報は手に入った。そして、風向きが変わった。東の空はだいぶ明るくなってきた。このタイミングを逃すと後々まずいかもしれない。

「ちゃんと保障してくれるのね？」ルリーは渡すように思わせる念押しをした。

「もちろんだ。俺たちはその辺はしっかりしている」

ルリーはそれを聞いてグランに近づいた。そして、彼に持たせておいたパズルマップを手にした。そのとき、彼女は小声でグランに言った。

「船を出すわ。煙を」

巨漢の男が乗る船との高さの差があった。ルリーはパズルマップを持ち上げ、巨漢はついにそれが手に入れた瞬間、グランが煙花火をあげた。巨漢の男は驚き、あわててパズルマップをとろうと思ったが、ルリーは手を下げ帆を一気に上げ風の魔法で船を動かした。ローレンツのほかの者たちは急いでルリーたちの船に乗り込もうとしたが、煙が邪魔で、また、味方同士がぶつかり合っ

しまいうまくジャンプすることもできなかったため、船に乗り込むことさえできなかった。

煙が晴れ、視界が開くとグランとルリーの船はもう遠くにあった。ローレンツの集団はもう追いつかないとして、追うのをやめた。

「おとなしく渡すとは思っていなかったが、まさか逃げられるとは思わなかったな」巨漢はつぶやいた。「まあいい。この海を渡るもの、必ずや俺たちローレンツから逃げ出すことなどできないのだから」

ローレンツとなる集団から逃げ出せたグランとルリーの船はさらに前進していた。後ろから追っ手が来きていないことがわかっていたが、逃げられるところまでは逃げて、ギート島で一休みしようと考えていた。何せほとんど眠っていないし、フィスト島に行きたくないという気持ちがあった。

「ところで、ルリー」航海中にグランは言った。「ローレンツなんていう海賊知ってたか？ おれ、長年この諸島で住んでたけど始めて聞いたぞ」

「いいえ、知らなかったわ。トレージャーハンターの私たちがこの諸島の海賊を知らないはずはないんだけど」

「そういえば、やつらはおれらがトレージャーハンターであることを知ってたな。どうしてだろう？」

「パズルマップは宝の地図よ。それに普通の地図とは違ってかなり危険を伴うもの。普通の人じゃ危険が伴えばやめるでしょうし、この地図の宝を見つけようとしているのは大体トレージャーハンターであるという予測は立てられるわ」

「じゃあ、あいつらもトレージャーハンターってことになるな」

「ええ、でも海賊って言ってるわけだしトレージャーハンターではないように思うわ。それに、この本のこともあるわ」

ルリーはポケットから本を取り出し、開いてみた。やはり読める箇所は『魔法』の部分だけ。ほかの場所はまったく読めず、いった

い何が書かれているのかが『魔法』についてのことだけとしかわからなかった。

ルリーは言った。

「この本とパズルマップは密接にかかわってそうね」

「でもそうとは限らないだろ。もともとその本はあいつらのものなんだし手に入れたいだけなんじゃないのか？」

「確かにそうだけど、私には密接にかかわっているように思えるわ」  
「その根拠はなんだよ？」

「女の勘よ！」

グランはそれを聞いて少しあきれた。ルリーは何かと頭を使っているなことを考えているのかと思っていたら、勘だったのだから。しかし、これはグランの勘違いで、このときだけルリーは勘だったのだ。そんなことをグランは知る由もなかったが。

「そういえば、私が思うローレンツとかいう海賊についてなんだけど」とルリーは言った。

「何かわかったのか？」

「まさか。あくまで推論だけど、あのローレンツっていうのは、私たちが知らないだけで意外と有名なのは確かみたいよ。あなたノイスト島で警官に襲われたのを覚えてる？」

グランがうなずくを見ると、ルリーは続けた。

「あのときの船には青い剣のジョリー・ロジャーが船にしろしとしてついてた。つまり、その船はローレンツのものであることを警官たちは知ったのよ。もちろん、たまたま通りかかっただけでしょうけど。だから、私たちを捕まえようとしてたり船がわかったりしたの。そのことから、ローレンツは有名な海賊であるとわかりそうじゃない？」

「確かにそうだな」グランは納得した。「しかしどうする、そんな有名な海賊さんたちに追われてるおれたちはいつあいつらに捕まるかわからないぞ」

「こっそりと行動することにしましょう。町ではできる限り人が少

ないところを通って、船も港に泊めるのはやめましょう。

ああ、それにしても嫌な敵があらわれたものね。今後の冒険にもっと大きな支障がでなければいいけど」

ギート島が見えてくると、自分たちの家の近くにある浜辺に船をおいた。そこはいつも家に宝を運ぶときに、誰にも見られないようにと使っている場所だった。もうあたりは明るく港は活気があるころだろうが、彼らに顔を合わすことはできなかった。できる限り人目を忍ぶ　そう決めたせいだった。

二人は寝る時間でないものの、眠たかったので眠ることにした。おきたときはすでに夜であったが、フィスト島にその時間帯に行く気が二人ともなかったので、家で一晚を明かしてからフィスト島へ行くことにした。

## 第09話 「フィスト島の元旦那」

グランとルリーはフィスト島に行きたくはなかったが、仕方なくフィスト島の土地を踏んでいた。この日の天候は曇りで今にも雨が降りそうだった。海は荒れ気味であるが、航海できないこともなくギート島から近くにあるフィスト島には行ける状態だったのだ。

そうなれば来るほかない。行けないこともないのに行かないのは彼らは好きではなかった。『物事は早めに終わらせる』というのが彼らの心にいつもとめられていたのだ。

フィスト島はこの天候のせいもあるが、普段からいつそう不気味なところだった。島のいたるところに落書きがされ、ゴミはそこらじゅうにあり嫌なにおいを出している。建物の裏 裏通りなどにはたくさんのごろつきが集まっている。そこは風もが嫌うかのように風抜けが悪い。緑はあるものの、ほとんどがかれていてみるも無残な状況だった。

本当にこんなところにパズルマップがあるのだろうか、と二人は思った。パズルマップはワイト諸島にある大きな島々を指して行っている。ワイト諸島で一番大きな島はワール島であるが、無人島であるからその数は入れずに数えると、一番大きな島はゲチトキ島になる島。その次はアイテン島、ノイスト島と続いている。その次に大きい島は、ギート島なのである。この順番的にはギート島にパズルマップがあるのではないかと考えるのが自然である。

「でも、パズルマップが島の状態を知るわけないし本当にここにあるのかも」

ルリーはそういい、島を歩くことにした。この島についてはほとんど知らないで、どこにパズルマップがありそうなのかもわからない。島を歩きパズルマップが反応するのを待たなければならない。フィスト島はそれほど大きな島ではないから、一周するのに一時間ぐらいなものだった。しかし、元の場所に戻ってきててもパズルマ

ツプは反応しなかった。

「やっぱりこの島にはないんじゃないか？」途方にうろかしているグランは言った。

「でも、これが示しているのはこの島なのよ。島の中心部に行ってみましょう。まだ外側だけだから今度は内側よ」

東西南北へと続く道がある場所が島の中心部であり町の中心部だった。そこには綺麗とはいえない水の噴水があり、石畳の場所だった。ここに来るとパズルマップは突如と光りだした。近くに宝があるのだ。

「でも、この光は弱いからまだ遠いのかも。いったい、どこに行けばいいのかしら？」

ルリーは東西南北の道の真ん中にそれぞれ立ち、パズルマップの光の具合からどこに行けばいいのかを調べるつもりだったのだが、パズルマップの光はこの道でも変わらなかった。

「どうなってるんだ？ 光の具合が変わらないなんて」

「わからないわ。ほんとうどうしちゃったのかしら？」

「もしかしたら、ここら辺にあるのかもしれないな。光が変わらないならこの辺としか考えようがないし」

「この石畳をそこらじゅうから取り除けて言うの？ そんなことしたら怪しまれるでしょ」

「じゃあ、どうするのさ？」

そう訊かれるとさすがにルリーも参ってしまう。パズルマップの光だけが頼りなのにそれがダメなんでは場所がどこなのかわからない。これといった方法もないのだ。完全に途方にうろかしてしまった。そんなルリーをみて、グランは雑談でもして気分を変えようと思っ

「それにしても、この島は自然がないよなあ。今まで行った島のどこにでも自然は残ってたのに、この島だけ残ってないんだから」

ルリーはその言葉を聞いてあることが思い立った。

「グラン、あなたってこういうときに役に立つことをいうのね！」

ルリーは賞賛の言葉をかけた。

だが、何がなんだかわからないグランはいったいルリーがどうかしてしまったのかとも思った。

「おれが何かしたか？」

「何かしたのよ。ねえグラン。今までパズルマップがあつた場所を思い出していつてみて」

グランは本当にどうしたのかと思いつつ、パズルマップを手にした場所を言つていった。

「アイテン島の廃坑、ゲチトキ島の遺跡、ノイスト島の洞窟だったはずだ」

「そう、そうね。その三つを踏まえて考えてみて。この島には何かが欠落してるの」

「自然か？」グランはさっきの言葉を思い出して言つた。

「自然といえば自然ね。今までパズルマップがあつた場所はいずれも古くから残されていると思われる場所なの。簡単に言えば、場所が固定されていたの。つまり、廃坑はその場所から動くことはできないし、ほかの二つも同じように動くことはできない。動くことができないところにこそ、パズルマップは残されていたのよ」

「じゃあ、この島で動かせないもので昔からあるところに行けばいいってことか」

「そういうこと。でも、あなたの言葉のようにこの島には自然が残っていない。ひとつ残らず町に変えてしまったのよ。だから、パズルマップの固定場所はなくなって、パズルマップもどこかわからなくなつてしまったのよ」

「それじゃあ……この島のパズルマップはどうなるんだ？」

「誰かが持っているか、最悪の場合は割れてるわね」

その言葉を聞いたグランは黙つたため、あたりには沈黙が続いた。二人は一体どうすればいいのかさらに途方にくれてしまった。もうこの島のパズルマップは手に入れることはできず、この冒険は無意味に終わってしまうのか……。

グランとルリーはとりあえず、フィスト島の役所へ向かった。ゴロツキの島といわれていても役所にはゴロツキなどおらず、島の状態を一番把握している場所だ。

二人は、本来はこんな危険な目をしてまでやらないのだが、石版などについて研究している研究者だと名乗って、役所の人間にこの島で見つけられた石版がなかったかを尋ねてみた。

「そういえば石版が出てきたことありましたね」と役所の人間は言った。「確か地図が書かれていた石版だったかと思いますよ」

二人は胸が躍った。さっきまでの途方にくれていたのは何だったのだろうと思うほどに。

そんな気持ちを抑えつつ、グランは言った。

「その石版は誰が持っているんでしょうか？」

「ええっと、誰だったかな。ああ、そうそう、確かこの島で骨董品店をやっていた人が持つて行きましたよ」

「その骨董品屋さんはどこにあるんですか？」とグラン。

「もうありませんよ。ギート島に店を移したとか」

「その店主の名前は？」

「ランズとかいいましたね」

ランズ！ それは彼らの一番の理解者であり、情報を提供してくれているギート島の骨董品屋の旦那だった。ああ、まさか、身近な人がパズルマップを持っていたなんて！

二人はすぐにギート島へと戻り、骨董品屋を訪ねた。しかし、二人は目を疑うことになった。骨董品屋があつた場所には瓦礫がさんらんして建物などなくなっていたのだから。そう、骨董品屋は文字通りつぶれてしまっていた。

たまたま近くを通った人にルリーは骨董品屋はどうしたのかを尋ねてみた。

「ああ、何でも昨晩に襲撃されたんだとか。詳しいことはわかってないんだけど、青い剣のジョリー・ロジャーの船に乗って襲撃したやつらは逃げたって話さ」



青い剣のジョリー・ロジャー……。紛れもなくローレンツが骨董品屋を襲ったのだ。しかしいったいなぜだろう？ 自分たちが入手した情報を彼らは知っていたのだろうか。

「それで旦那はどうしたの？」ルリーはさらに訊いた。

「そのときは店にいなかったから無傷で終わったとか。今は自宅にいるという話ですよ」

二人はその人に場所を教えてもらい、その場所へと向かった。

## 第10話 「最後のピース」

確かにその場所にランズはいた。小さく古臭い家だったものの、彼らはランズに快く迎えられて中に入った。

「大変だったな、店のほう」最初に切り出したのはグランだった。

「ええ、品物がみんなめちやくちゃでこれじゃ商売もできねえ。まあ、幸いなことに品物の支払いは済んでるから、金を請求されることはないがね」

みんなめちやくちゃ、という言葉に二人は反応を示した。この様子ではパズルマップさえも壊された雰囲気だ。

「ところで、こないだ私たちが買ったパズルマップなんだけど」とルリ。「あなた、あの地図のピースを持ってない？」

「あの地図のピースを持っていたらそのとき一緒に売ってるよ」ランズは笑いながら言った。

「あなたが忘れていたかもしれないでしょ。そのピースっていうのは、あなたがフィスト島で骨董品屋をやっていたときに手に入れた石版のことなんだけど」

ランズはそれを聞いて驚いた様子だった。フィスト島時代のこととは自分以外、誰も知らなかったと思っていたからだろう。

「そのことをどこで知ったんだ？」ランズは訊いた。

グランはさっきまでフィスト島にいたことなどを話した。

「なるほど」ランズはうなずいた。「できればフィスト島時代のこととは言及しないでしょう。あまりいい思い出はないんでな」

「それはいいわ。で、結局、そのときの石版はどうしたの？」

「そのときの石版は俺がまだ持つてる。この家の地下室にそれはしまつてあつたんだ。どうせ、ワール島しか書かれていない石版地図だから売れないだろうと思つてな」

この家は上こそないものの、下はあるのだと思つた矢先に、ワール島の名前が出てきたことに彼らは驚いた。ランズが地下室へ行く

とグランは言った。

「どうやら最終目的地はワール島のようだな」

「ええ。でもどうしようかねえ？　ワール島なんか私たちが入れないわよ」

二人はローレンツの島から逃げ出したときにぶち当たったワール島のあの流れを思いだした。あの中型船でさえあの状況だったのだから、自分たちの小船としかいえない船では到底ワール島の土地を踏むのは無理である。

「まあ、それについてはパズルマップが何とかしてくれるだろうさとグラン。」「今までだってパズルマップはそうしてきてくれたんだから」

「ええ　そうなってくれるといいわね」

「何か不満でもあるのか？」

「ないけど、今回ばかりはうまくいかなそうな気がするの」

ちょうどそのときランスが戻ってきたので、グランは返答しなかった。

ランスはぼろぼろの木の机の上に石版をおいた。

その石版は確かにワール島の地図がかかれており、パズルマップのピースと同じもののように思えた。グランはパズルマップを取り出して、その石版を残っている真ん中にそれをはめた。ピッタリだった。

すると、石版は弱々しく光り始めたかと思うとどんどんその光を増していき、三人は目をふさがなければならぬほど光は強くなっていた。部屋いっぱい光が満ち溢れ、そこにあるぼろぼろのものがまるで新品のようにさえ見えた。

だいが光が弱まり、三人は目をあけて石版を見ると、石版の地図が改変されていた。今まではワイト諸島全体の地図だったのが、今度はワール島の詳細地図になっていた。すみからすみまで地図になっており、どこに何があるかまで詳細に記されていた。

ワール島の真ん中にはなにやら山があるらしく、その場所に×印

がついてあった。

「どうやらここに、宝はあるようね」それをみてルリーは言った。

「そうだな。ありがとう、旦那。料金のほつとかはどうなってる？」

「売り物じゃねえからいらねえよ」とランズは言った。「ただ、俺がフィスト島にいたこととフィスト島時代のことと言及さえしなればそれでいい」

二人はうなずき、言わないことを約束すると、次の壁を越える方法を考えなければならなかった。

「ワール島にはどうやってはいるか」

「あそこの海流は相当すごかったものね……。私たちの船じゃどうしようもないわ」

「俺もワール島に行ったことはないが」ランズは口挟んだ。「行き方を知っているやつなら知ってるが」

「本当か、旦那？」とグランはいった。

「本当だとも。そいつもフィスト島にいたやつでな　まあ、そんなことはどうでもいい。じゃあ、そいつのところに行ってみるか？」

「ぜひ、紹介して」今度はルリーが言った。

「ただしそいつにもフィスト島については言及しないことで頼む。場所はアイテン島にある山の頂上より少し下にある山小屋造りの家だ」

二人はさらにランズから紹介状を書いてもって、お礼をいってからアイテン島へと向かった。

アイテン島へと向かっている途中にどうやら日が暮れ始めたらしく、どんどんとあたりは闇に包まれていった。そんな中、グランとルリーはフィスト島のことを考えていた。どの道、この後にワール島については知るのだから、ワール島については考えても何も進まなかったのだ。

フィスト島についてというよりも、ランズについてだったというのが正確であろう。いったいランズはフィスト島からなぜギート島に移ったのだろうか。ゴロツキが店を壊そうとしたから？　しかし、

ランズも客商売をしている割には口がよくない。あの口調ではごろつきにも対抗できるだろう。だったら、店の経営が悪かったのだろうか？ それでも、そのことを隠す必要はない。

これから会う人にそのことについては言及しないように言われたので、言及はしないことに決めていたが、二人はその人物がフィスト島時代のランズについて知っているのは間違いないだろうと思っていた。

ランズは人付き合いがほとんどないのにもかかわらず、その人物を知っているといえばフィスト島時代に知り合った人間であるとかあまり考えようがない。骨董品のお得意相手かもしれないが、山奥に住むものがわざわざギート島まで来ることめつたにない。

二人はいろいろ考えたが、まとまった答えはでないまま、アイテン島に到着した。

山小屋造りの家といわれても、あたりは木ばかりで家を見つけるのは一苦労だった。やっと見つけたときにはもう闇が支配しており、月も出ておらず暗い夜だった。

ノックしてみても、中から出てきたのは、ランズと同じ初老の男であごひげを蓄えている男だった。

「こんな夜に何のようかな？」

「実は、ランズさんから紹介されて」ルリーはそいいながら紹介状を渡した。

男はそれを読むとルリーにそれをかえし、二人を中へと招きいれた。

山小屋のような造りであるにもかかわらず広い部屋でランプが四隅について部屋を照らし出していた。入り口左には書き物机があり、前方右手にはキッチンのようなものがある。男は真ん中にあるソファに二人を座らせ、自分は書き物机の椅子に座った。

「で、事情を説明してくれんかね」と最初に話したのは男のほうだった。「ランズの紹介状にはワール島にお前さんたちを行かせるようにとしか書かれていない。いったい、どういった理由でワール

島に行くのかね？」

グランとルリーは交互に話の全貌を聞かせた。

「なるほど。宝のためにあの危険な島に行くのか」

「危険な島？」グランは言った。

「お前さんがたはいったことがないのかね、ワール島に。あそこは危険な海流が流れ、常に嵐が起こっているあの場所が危険じゃないといえは嘘になる」

「しかし、そこに行くしかないんです」とルリーは言った。「宝はそこにあるし、それに、ローレンツという海賊たちもこのパズルマツプを狙っているんです。私たちが先に行かなければ海賊たちの手におちてしまいます」

男はローレンツの言葉に眉をあげた。

「ローレンツが狙ってるとな。なぜ、そのことをお前たちは知った？」

「最初は知らなかったんですが、あいつらに捕まって脱走した後、ゲチトキ島で再開してそのときにローレンツの名前を聞きました」

「お前さんたちを捕まえたのか。ふむ」

男は何かを考えるように思案にふけり始めた。その間、部屋には沈黙が立ちこめ、時々吹く強い風の音が聞こえてきた。

二人は男が何かを話すのを待っていた。彼らは早くワール島に行く手段が知りたいし、できることならこのことは内密にことを運びたかったのだ。多くの人たちに自分たちがトレジャーハンターでギート島に住んでいると知れ渡ったら彼らはもうギート島には住めなくなる。

突然、男は声を出した。

「いいだろう。ワール島に行くための手段を教えてやろう。ただし、それにはまずジェル島に行ってもらわなければならない」

「ジェル島って、アイテン島から北西にある島ですよね？」とルリーは訊いた。「かつては宝石がたくさん採れ、石炭もたくさん採れたとか」

「そうだ。その島の村の村長さんのところに行きたまえ。わたしの名前を言っ、ワール島に行きたいという旨を伝えれば教えてくれるだろう」

「そういえば、あなたのお名前は？」とグランは言った。

「わたしはシェークという。村長さんの名前はスーピアだ」

二人はお礼をいって、家を出た。あたりは真っ暗になっており、もうどこに道があるのかすらわからなかった。だが、シェークがランプを貸してくれて、シェークがよく通る道を教えてくれたので彼らはなんとか下山し、アイテン島を出航してジェル島へと向かうことができた。

## 第11話 「ジェル炭鉱の風」

かつては栄えていたジェル島も今では廃れた島となってしまっている。今では宝石も取れなくなり、穴を掘るものこそいないがかつて彫られたその穴たちの残骸が残り、埋めようとしていても埋め切れなかったのか、埋めた跡があるが完全に埋まっていない穴があったりもした。宝石は取れないものの、石炭は少しばかりとれ、今ではそのわずかな石炭を取っているものがいた。

村はモダンな建築物はこれひとつもなく、みな、少しの衝撃で崩れそうな雰囲気のものばかりだった。地震が来たらこの村はどうなることやらと思うす。

そんな村の村長の家も例外なく村の家々と同じだったものの、それは少しの衝撃で壊れそうには見えなかった。

「ふむ、ワール島の行き方をシェークから言われたか」

村長のスーピアは初老を超えて、もうおじいちゃんのようにしわができ白髪も混じり始めているご老体だった。そんな彼の話し方もそれに準拠していた。

ルリーはこの成り行きを話して聞かせると、スーピアはいった。「いいじやろう、ワール島への行き方を教えてやろう」

「本当ですか！ ありがとうございます！」グランはその言葉にすべての気持ちを乗せた声でいった。

「ところで、お嬢さん。あなたは魔法使いかな？」

不意に質問されたのでルリーは面食らったが、「はい」と返答をした。

「なるほどなるほど。では、行き方を教えてやってもいいが、あなたたちにはこの島にあるジェル炭鉱に行ってもらわねばなりません」「ジェル炭鉱？」グランは言った。

「この島で一番有名な炭鉱じゃ。その炭鉱の一番奥に行きなされ。そうしなければ教えることはできません」



「どうしてまた」

グランの言葉はスーピアにさえぎられた。

「とにかく、ジェル炭鉱の最深部に行かねば教えられませぬ。その点についてはご了承願いたい。さあ、若者たちよ！　ワール島に行くための方法が知りたければとつと、ジェル炭鉱に行くのじゃ！」

この炭鉱をみてグランとルリーは、なにか不気味な感じを覚えていた。ジェル炭鉱はとにかく広い場所であつたものの、その広さはその暗くなつた炭鉱内と心をよりいっそう暗くさせた。今にも石が落ちてきそうな場所もあれば、かつて炭鉱だつたことを思わせるスコップや手押し車、取り残された小さな石炭がおいてある。

しばらく歩き、たつたいま、道を左に曲がつたとたん、彼らに風が吹きかかった。顔にもその風を受けているので、この道に風が通つてくることがわかつた。

「なんで、こんなところに風が……」グランはつぶやいた。

「奥は出口になつてゐるのかしら？　でも、それでも問題ないわね。とにかく、気にせず先に行きましょうよ」

だんだんと道が細くなつてくると共に、感じる風の風力もどんどん強くなつていつてゐる。それは道が細くなつてきているからだけではなく、風の発生源にどんどん近づいてきているからであるからだつた。

こんな風の強い炭鉱というのは何なのだろうと、ルリーは考え始めた。炭鉱にこんな強い風を吹かしていった何をしようとしているのだらうか、と。そのことをグランは考えていなかったが、スーピアがなぜこの炭鉱に自分たちをやつたのかを考えていた。

二人ともその考えの答えに達することはないまま、ある場所を右に曲がると、先に進んでいたグランはわつと驚いてしまった。

「な、なんだよ、この場所。ここから先すごい風が吹いてるじゃないか！」

ルリーもその場所にでてみた。すると、すごい勢いの風がルリー

に襲い掛かり、一步も前に進むことを許さない。

「こんなところを進めって言うの？」ルリーは曲がる前の道　それほどもで風の強くない場所　に戻って言った。「無理に決まってるじゃない、こんなところ。この風じゃいくらやっても進めないわ」「だよなあ。でも、ここまで来るのに、分かれ道がなかったわけだしここを進むしかないんだよな」

「そんなことをいっても、これじゃ進めないわ。どうしましょうか。ここじゃ、パズルマップとは関係していない場所だから、マップを使うということはないんだろうし」

しばらく沈黙と風の音しか聞こえない状態が続いた。すると、グランは言った。

「腹ばいになって進んでみるとするか。風を受けなければ大丈夫なわけだし」

ルリーはそれについて何もいわず、何かをまだ考えていた。グランはルリーがこれに同意していないとわかったが、自分で考え付くのがそれだけだったし、それをやるだけやってみることにした。しかし、たって歩くより進んだものの結局あまり進めず、元の場所にある壁にその足がついて、風に押されてしまった。

「ダメなのね」と、それをみていたルリーは言った。「そもそも少し無理があつたんじゃないの？」

「なんでだよ？」

「これだけ強い風なんだから、下にもそれだけ強い風が吹いてるでしょうよ。この風は嵐が起こつたときにおきる風並みの強さだから、そう簡単には進めそうもないわ」

「じゃあ、どうするっていうんだよ。このままじゃ、ここで立ち往生したままになっちゃう。いったん、戻るか？」

「戻ってどうしようっていうの？」

「スーピアさんのところに行って、通れない場所があるとしてもいえは教えてくれるよ」

「たぶん、教えてくれないわ」ルリーは即答した。「そもそもこの

道をあなただけで通ることはできないんだと思う」

「どうして？」

「スーピアさんがいったでしょ。『あなた魔法使いか』って。そして、『はい』と私が答えるとこの炭鉱に行くように指示した。もしかしたら、この場所があるのを知っていて、それをクリアできるのが魔法使いだけだといってるのかもしれないわ」

「じゃあ、おれはどうしようもないってことか。魔法使いじゃないし」グランは落胆したようにいった。

「そうなるけど、案ぐらい出してよ。もしかしたら、役に立つかもしれないし。あなた、時々いいこというもの」

「そういえば今思ったんだけど、ルリーってどんな魔法が使えるんだっけ？」

付き合いが長い二人だが、グランはルリーが使える魔法の数はほとんど知らなかった。そもそも、ルリーが魔法使いであること自体を冒険中は忘れていたりするほど、彼女はあまり魔法を使わないのだ。

「風の魔法。火の魔法。大きくしたり小さくしたりする魔法。雷の魔法ぐらいかな。あとはまあ、たいしたことない魔法が二、三ぐらい」

「そんなに多くないんだな」

「本の中みたいに多いとも思ってるの？ 本の中ほど私は賢くないわ。それに魔法自体も同じのが多数あるだけよ。風の魔法と一口にいっても、威力が違うのが何個もあるの。私はひとつしかそれぞれ覚えてないけど」

「そうだったんだ。いま、そのことについて初めて知ったよ。ルリーと一緒に何年もトレージャーハンターやってるかわからないのに」  
「ほとんど魔法を使わないからね。さあ、それよりここを突破する方法を考えましようよ。こんなところにずっといるのは嫌だわ」

「そうだ！」しばらくするとグランはひらめいたようにいった。「あっちが風ならこっちも風で行けば大丈夫なんじゃないか？」

「どういう意味？」

「ルリーが風の魔法を使いながら進むのさ」とグランは得意げに説明を始めた。「そしたら、こっちに向かって吹いている風は押し返されて、こっちから吹いている風がある場所は無風になるってことさ」

その説明にルリーは大体でくみとり、理解した。

「つまり」とルリー。「風と風がぶつかれば中和されて、その部分は無風になるから進めるっていいわけ？」

「まあ、そんな感じ」グランはあいまいに言った。

「じゃあ、やるだけやろうか。私はほとんど考え付いたことはないし」

そついうとルリーは少し心を落ち着かせ始めた。どれくらいこの道が長いかは目をあけられないほどの風が吹いているためわからないから、いつまで魔法を使わなければならないかわからない。この風力に対して中和するほどの魔法を使わなければならないとなると、そう長い時間は使っていられない。そうならないためにも、そうしなければならなかった。

それを知ってか知らずか、グランは何も口出しをしなかった。ただ、そのルリーの姿を見守るだけ。

「いくわよ」

グランはルリーの後ろについた。そして、風が打ちつける壁にその背をつけ、その前にルリーの背を押すために両手を前に出し、ルリーはそのとおりに背をやった。

その準備ができると、ルリーはぶつぶつと呪文を唱え、そして、風の魔法を発動させた。その風は普段、帆船を動かすための風力ではなく、また、あの中型船を動かすときの風力以上のものであった。そして、ルリーは足を一步動かした。その足は軽く一步をつき、また一步と進み始めた。それはグランも同じで、どんどんと前進を始めた。

グランは数歩歩くと、この考えが成功したことを、ルリーの魔法に気が散るから声は出せなかったが、内心喜んでいた。

三分が経過すると、ルリーの体力は消耗し、風力が弱まり始めた。足をあげると、少し風の影響をうけて重く感じ始めていた。

「がんばれよ、ルリー！」

グランはルリーを応援し、その背中を押す力を強めた。重い足取りが、一步一步とゆっくり進む。四分経過しても、その足取りは三分経過後と変わらなかった。すると、また、その足取りが重くなり始めた。半ば戻されるようなその感覚の中、唐突に二人は足が軽くなり、思わず躓いて床に倒れてしまった。

グランはルリーに乗っかるように倒れてしまったので、すぐに立ち上がり、大丈夫か訊いた。しかし、返事はなく、抱えるようにしてルリーを持ちあげ、声を再度かけた。しかし、それでも彼女からの返事はなかったが、別の場所から返事があった。

「その子は魔法の使いすぎで体力がなくなり、眠っているだけじゃ。心配はいらない」

その声の主を探そうと、グランはあたりを見渡した。その声の主は背後におり、その人物は先ほど会った村長ではないか。

## 第12話 「ワール島の歴史」

「どうして、こんなところに……？」驚きの表情でグランは言った。「なあに、たいしたことじゃありません」とスーピアは言った。「それに説明するにはその子がおきてから出なければ二度手間になるからな。それまでは話さんよ」

ルリーがおきるまでの間、その場所には沈黙が続いていた。

その間、グランはその場所を観察していた。シェークの家より少し広いぐらいの場所で、当たり前だがみな岩の壁ができている。壁には四方に一本ずつたいまつがあり、それが部屋を照らしていた。太陽の光はまったく入ってきていないので、その明かりがなければここは真っ暗な場所なのだろう。それ以外に壁にかかっているものはなく、装飾品のようなものもなかった。

出入り口は先ほどの、強風が抜けている道だけなのだが、その風はどうやら、この場所から吹いてはおらず、道だけに風が通っている状態になっているのがわかった。いったい、ということなのだろうとグランは考えたが、これは魔法が関係しているのではないかということ結論に達した。

しばらくすると、ルリーは起き上がった。グランが声をかけると、彼女は普段どおりの声で返事をした。

「ほほほ、起きたか」とスーピアは言った。

その声をきいたルリーはグランと同じことを口にした。

「それについてはこれから話す」とスーピア。「それより後一名、すぐに来るからまっくれ」

そういうと、風が吹く道からあごひげを蓄えた男 シェークが登場した。その姿をみた二人はいささか驚いたが、口にすることはなかった。

シェークがスーピアの隣につくと、スーピアは咳払いをしてから話を始めた。

「さて、お前さんたち、よくここまでたどり着いたな。ここが話したジェル炭鉱の一番奥の場所じゃ。これで、お前さんたちはワール島に行くための方法を知ることができるようになった」

「それはありがたいです」とルリーは言った。「しかし、スーピアさんとシェークさんがなぜここにいるかという理由もお話願いたいです」

「それについてはこれから話すつもりじゃったよ。まあ、できる限り口を挟みなさるな」

グランとルリーはうなずいた。スーピアはうなずき返し、話を始めた。

「ワール島への行き方は後々話そう。その前にワール島について話さなければならぬ。お前さんたちはワール島について知っていることは、周りに嵐が常におこっているということだけかね？」

「すくなくともおれはそうです」とグラン。

「私も」とルリー。

「ならば一から話そう」　ここで少し間を空けて　「その昔からワール島の周りには嵐が起こっていた。何百年以上も前のときからそのことは変わっておらんのだ。なぜそうなっているかという、もともとワール島は魔法使いたちが住む、いわゆる魔法界であったのじゃ。ワール島には魔法使いしか住んでいない。グランのよくな普通の人間はいなかったのじゃ。」

魔法使いは人間たちとかかわることは避け　中には脱走し、人間たちと触れ合うためにワール島を捨てたものもいたが　ワール島で細々と暮らしをしていた。そんなあるとき、ワール島に住む一人の魔法研究者がいたのだが、その者が、ある魔法を使ったところ、ワール島には災いが起こり始めた。取り囲んでいる嵐はワール島内部に被害を起こしだし、人々の心は深い傷を負った。それに追い討ちをかけるように内乱が始まり、最終的にワール島に住む魔法使いたちは二人を除き、みな死んでしまった。

そして、いま、この世で魔法使いが少ないのは、ワール島かつて

脱走したもののたちの数も少ないことに関係している。脱走した魔法使いたちの子孫がいまこの世の中にいる魔法使いたちなのじゃ。

さて、ワール島を壊滅状態に追い込ませたその魔法を記した文献がいまひとつだけこの世に残っている。それはいまだどこにあるかはわからないままだが、それを知るためのひとつの手がかりが一個だけある。それこそ、君たちが持っているパズルマップなのじゃ」

それを聞いたグランとルリーは驚きの表情をあらわにした。

「じゃあ、パズルマップがワール島を示したということは、その文献がワール島にあるということ　？」ルリーは驚いたときの声で言った。

「そうじゃ。つまり、ローレンツはかつてワール島を壊滅させた魔法を手に入れ、ワール島ではなくワイト諸島　いや、世界を壊滅させ、その世界を我が物にしようとしているのじゃ」

それをきいて、二人は何もいえなかった。ローレンツがまさかそんなことをたくらんでいたことと、自分たちがいかに危険なもの隣り合わせになるうとしているのが。二人はこの二十年とすごした人生のなかで、一番の恐怖に襲われた。

「この事実を知っても、ワール島へ行こうとするかね？」とスーピアは言った。

その問いの答えを今の状態の二人はできなかった。が、ルリーは言った。

「行かないといったら　？」

「ワール島への行き方は教えてやらんだけじゃ」

「そういう意味ではなく、パズルマップとその書物はどうするつもりですか？」

「パズルマップはわしが責任をもって封印をしよう。書物についてはそのままとなってしまうが」

「取りに行かないんですか？」とグランが口を開いた。

「行かないのではなく」とシェークが口を挟んだ。「行けないのだよ、わたしたちはワール島にね」



「どういうことですか？」とルリー。

「話せばなるまい」とスーピアはため息をついた。「わたたちがその書物を手に入れてはなんのじゃ。わたただけでない、お嬢さんもその書物を手に入れてはなん。なぜなら、その書物は魔法使いたちをとりこにしてしまうのだ。いくら強い意志を持つものでさえもじゃ。だから、その書物に触れてよいのは人間だけ。わしらは不幸にも魔法使いで、それに触れることは許されんのだ」

「あなたがたが魔法使い！」グランは驚きの声をあげた。「じゃあ、ここには魔法使いばかり……」

「そういうことになるな。わたしも魔法使いなわけだし」とシェークは言った。

「さあ、お嬢さん」とスーピア。「これをきき、行くか行かぬかをきこう。もし行くというならば、その書物を君たちは手に入れることになり、行かないならばその書物はその場にこのあとに残ることとなる」

グランとルリーは思案を始めた。このまま行き、この冒険の幕をちゃんとおろすのかそれとも冒険の途中で幕をおろすのか。彼らは幾度もこのような恐怖に満ちた冒険をこなしてきた。その恐怖が一番高まるこの冒険を怖気づいてやめてしまうのか。

しかし、彼らは恐怖を恐れないトレジャーハンターであること、をこのとき証明した。

「私は行くわ。ここまできてやめるわけにはいかないし、ポリシーにも反するから」

「おれもだ。ここまできた冒険を投げ出すわけにはいかない」

二人はその言葉を強く言った。

それをきいたスーピアは言った。

「ならば教えてやろう。じゃが、ワール島に行くまでには時間がある。なぜならば、ワール島に行くには二つのことが必要だからじゃ」

少し息を入れて続けた。「まずひとつは、お嬢さんがある魔法を覚えなければならぬこと。この魔法を覚えなければワール島

「入ることはできぬ」

「その魔法というのは？」とルリーは訊いた。

「風の魔法じゃよ。巨大な風で船を動かさなければ、ワール島の流れに流されてしまう。その流れに栄えるほどの風の魔法を覚え、船を動かす必要があるのじゃ。しかし、ひとつ問題があつてな。その風の魔法を覚えるにはひとつの書がいるのじゃ。その書をわしらは持つておらん。その書がなければ風の魔法は覚えられん」

「それはどこにあるんですか？」とルリー。

「その書があつたのは紛れもなくここだったのじゃ。しかし、ローレンツがそれを持ち去つてしまい、今ではローレンツが持つておると思うのじゃ。やつらもワール島に入ろうとしている。風の魔法を覚えようとしてるんじゃないや」

それをきいてグランははっと思ひだすようにしてルリーに、ローレンツの本拠島でつかまつたときに手に入れた本のことじゃないかいった。それをきいて、ルリーはその本をスーピアに渡した。

「おお、まさしくこれじゃ！」とスーピアは喜んだ。「まさか、これを持つているとは……。いやはや、驚きじゃな」

「“魔法”とだけ書かれていたので、もしかしたら何かのやつに立つかもしれないと思つて持つてきていたんです」ルリーは説明をした。

「ふむ、お手柄じゃな。これで、風の魔法を覚えられる」

「ところで」とグラン。「二つ目はなんなんだ？」

「ああ、二つ目か。二つ目じゃが、これはワール島に入れる時期を待つということ、いまのわしらじゃどうしようもできないことじゃ。風の魔法を覚えながら気長に待たねばならぬ」

「入る時期はいつになるんですか？」とルリー。

「おそらく、次の満月の日となるう。昨日がちょうど満月だったし、時間はまだあるし、その間に覚えなくとも次の満月の日ならば大丈夫じゃ」

「入れる時期というのは満月の日なんですか？」グランは訊いた。

「うむ。ワール島の流れや嵐は満月の日になると弱まるんじや。その流れが弱くなったときじゃないと入れんのじや。さあ、いくとなったらお嬢さんは特訓じゃぞ！ この風の魔法を覚えるのには時間がかかるからな」

スーピアはシェークにその魔法をその場で覚えさせるように言いつけると、グランと共に村へと戻って行った。

「スーピアさん、なぜあんな狭いところで特訓するんですか？」グランは疑問を訊いてみた。

「あの場所は風の神がいるといわれているのじや。そこで習えば覚えるのも早い。それに、あの部屋に入るためのあの強風は、その魔法使いの風の魔法の力量を測るものであるんじやよ。別の見方をすれば、風の神を守るともいえるがな。それよりお前さんは飯は作れるかね？ お前さんはこれといってやることがないから、飯ぐらい作ってもバチはなかるう」

その日からグランとルリーは離れて日々をすごすこととなった。毎日、あの狭い部屋 風の部屋というらしいが でルリーは風の魔法を覚える特訓を続け、グランはスーピアの家で、雑用をやらされながらローレンツが現れたときの対処法やワール島に行くとき限りで使う武器の使い方などを教えてもらっていた。

そして、満月の日の前夜に、ルリーが風の魔法を覚えたことをグランとスーピアに伝えられた。

「ならば明日の満月の日に間に合うな」とスーピアは言った。「ならば、今日は休むがよい。明日に備えるんじや」

### 第13話 「パズルマップの印」

その日は快晴だった。空には雲ひとつすらなく、水平線を望むことができる。また、波は穏やかだった。この分ならば、ワール島の流れが発生し始める場所の特定がしやすく、すぐにさらに強力な風の魔法を使えることができるようになるかとスーピアは思っていた。しかし、問題点もひとつばかり残されていた。その問題点はグランとルリーにとっては大問題になりかねなかった。

それはローレンツの問題だった。ローレンツの本拠島であるウィン島はワール島近くに存在しており、ワール島に近づけばローレンツにその姿が見られる可能性があるのだ。そうならば彼らの船は襲われ、最悪の場合は書物入手されこの世界がまずいことになる。

ローレンツの本拠島がワール島近くにあるウィン島であることはグランも知らされていたので知っていたが、そのことについては考えることはなかった。しかし、彼はローレンツが襲ってきたときの対処法を教えられたし、彼らが襲ってきたとしても多少の危険回避はできる自身を持っていた。

出航前にスーピアはその考えを二人に話しをした。

「そして、グラン。ルリーにわしが教えた対処法などのことを教えてやるのじゃ。もしものとき、グランよりルリーのほうが頭の回転がいいんじゃない」

「頭の回転はおれだってはやいさ。そりゃあ、ルリーには劣るけどさ」グランはむきになった。

「はいはい、そんなことはどうでもいいから後でちゃんと教えてよね」とルリーはなだめついでに言った。

こうして、二人はジェル島を出航した。出航してからまもなくグランはルリーのローレンツが攻撃してきたときの対処法を教えた。そして、最後に一本の剣を取り出した。

「この剣はもらったんだ」とグランは説明を始めた。「ワール島に

行くことになるなら、必要だからって。今まで剣なんて使うことはなかったから、簡単な剣術も教えてもらったんだ」

「どうでもいいことだわ。別に今回かぎりでしょ、剣を使うのは。まあ、今回一番危険になるのはグランなわけだし、煙花火で逃げるより自分の身を守るものもあつたほうがいいかもね。グラン、あんたちんとその書物を手に入れるのよ。そして、手に入れたら焼き払うのよ」

彼らには書物を手に入れても使い道がないように思えた。それにこの世界を支配する気はなかった。そのため、手に入れたらその悪魔は焼いてなくしてしまおうということと考えが一致していた。もちろん、それはスーピアたちの意思でもあるのだが。

遠くにワール島が見え始めた。ルリーはその覚えた魔法を使うための体力を温存するために、精神統一でもするかのように目を閉じていた。風はワール島に向かうための西風が吹いていたし、彼女の魔法を使わずともこの船は着々とワール島へと近づいていた。

そのとき、スーピアが予想していた問題が起こった。グランは遠くに一隻の船がこちらにやってきているのがわかった。

「ルリー、一隻の船がこっちに来てる。おれに見える限り、黒の旗をつけてるみたいだ」

ルリーは目を開き、その船をみてみた。

「確かに黒い旗がちらほら見えるわね。ローレンツかしら？ まあいいわ。この距離ならまだ大丈夫。グラン、急いでワール島に入り込むわよ！」

ルリーは帆の前でなにやら長々と呪文を目を閉じながら唱えた。そして、目を開いたと同時に帆はいつきに風に押され、船は猛スピードでワール島の海流に乗りこみ、ワール島の中へと入り込んで行くルートをたどり始めた。ワール島の嵐はこの日でも強力な風を吹かしており、船は大波に乗ったように揺られていた。視界も悪かったが、嵐の風に負けずルリーの風の魔法のおかげで、まっすぐ突き進んで行ったため視界など関係なかった。

が、その視界の悪いさでいつワール島の陸地に到着するかがわからなかったため、船は勢い余って陸地に乗り上げてしまった。

「ここがワール島か」

陸地に入り込むと、急に視界が晴れた。生い茂った草木ばかりがその目に飛び込んできた。その草木の間から真正面に山があった。それほど標高は高くなさそうで、すぐにでも上れそうな山だった。

ここで、パズルマップを取り出し、グランは地図を確認した。

「書物はあの山にあるんだな」それをみてグランはつぶやいた。

「ほかに山みたいなのは無いものね。あの山しかないわ」とルリー。「じゃあ、いきましよう。その前に船はすぐ動かせる場所においておきましょうよ。もしものとき、すぐにでも逃げられるようにね」

唯一ある山に近づくのは大変な作業でもあった。山に近づくにつれて林は濃くなっていき、どんどんと森と化していった。その木々の間は狭く、通り抜けるのすら大変な場所や通れない場所など数多く存在していた。

そんな状態が続き、ついにはあたりが暗くなったとき彼らはまだ森の中を歩いていて。その状態で、彼らの左手には森を抜ける場所が見えた。その場所にはなにやら建物らしきものもあるのが認められた。

それに気づいたグランはルリーにあそこで休むことを提案した。

「おそらく、あそこがスーピアさんがいていた町なんでしょうね。確かに休めそうだけど、行くのはやめておきましょう」

「なんでさ？ こんなところで野宿するよりかはましだと思っけど」「確かにましかけど、建物が残ってるなんてなんか変な気がするの。それに、道からずれたらこっちまで戻るのも大変でしょ」

ルリーはいい終わると歩き出した。グランはあくまで町のほうへと行きたいと願っていたが、何を言ってもきかないルリーが先に進んで行ってしまっていたので、彼は彼女に結局ついて行く羽目になった。

奥に進めば進むほど木々は増え始め、視界は悪くなっていった。

同じ距離を歩くにも、この場所で歩いたら二倍はかかって歩くことになっていった。しかし、彼らはめげずに歩き続け、やっとの思いで山のふもとにたどりつくと、グランは目を疑いなくなった。

山のふもとにはたくさん崩れた建物があった。その光景はまさしく無残なもので、心を痛めるものであった。その場所はもととは町のような面影を少しばかり残しており、損傷が軽い店の看板が倒れてあつたりした。

「じゃあ、さっきの建物はなんだったんだ？」グランは不審に思ったのでつぶやいた。

「もしかしたら、その魔法研究者が住んでいた家かも。あゝそのときルリーはグランが輝いてるのをみて驚いた。しかし、そのことにグランは気づいていないようだった。『グラン、パズルマップを出しててよ』」

そのとき、初めてグランは自分の体が光っていることを認知し、パズルマップを取り出した。予想通り、パズルマップは輝いていた。しかし、その輝きは弱く、近くに問題の書物がないことを示していた。

「パズルマップが反応してくれるならすぐわかるわね」とルリーはいった。「さあ、このパズルマップに導かれながら書物を探しましょう。この山にあるんだから登山すればいいんだし」

「ちよつとまってくれ、ルリー」　グランはルリーを引きとめ

「パズルマップをみてくれ。新しい×印がここについてる。しかも、色が違う」

「本当だ。ちようど、山のふもとのところね。かといって、最初の×印がついてたところにもちゃんと×印はあるわね。いったい、こつちの印は何なのかしら？」

「もしかしたら、おれらの位置かな？　ほら、ちようどふもとにいるわけだし」

「でも、私たちの位置が印されるなんてことがあるのかしら」ルリ

「は異論を唱えた。」

「パズルマップが輝いたり普通のものじゃないんだからあるんだよ、きつと。今回はおれもさえてるだろ？」

「じゃあ、そういうことにとりあえずしましょうか。じゃあ、道案内はグランに頼むわ」

まかせとけ、とでもいわんばかりに胸をたたくと、グランが先頭で登山を開始した。登山も楽ではなかったが、森の中と比べると比較的に楽に思われた。それほど急な山道でもないし、これといって冷や汗をかくような場所もない。何から何まで安全そのものという感じだった。

パズルマップの輝きはどんどん増していった。グランはそれを見ながら歩いていったからそれがすぐに感じ取れた。新しくついた×印も彼らが歩くにしたがつて、位置を変えていき、グランの読みどおりそれは彼らの位置を示していたようだ。しばらく、グランはそれをみていると、この山から少し離れた場所 彼らがさつき通っていた道の近く に新しい×印ができていることを発見した。

グランはそのことをルリーに知らせた。

「ねえ、ここでこの印について考えてみない？ 私たちがギート島でパルマップを完成したときにできた印は赤色をしている。私たちの位置を示す印は青色をしている。そして、この新しい印も青色をしている。このことからわかることは？」ルリーはグランに質問した。

「赤は本。青はおれたちつてことかな」

「大体はそうかも。私の考えはね。赤色はあなたのいう本 つまり宝。青色は私たちを指している つまり広義の人間を指していると思うの。もし、そうだとするならこの新しい青印は」

「ローレンツ」グランは彼女の言葉を引き取るようにしていった。

「もしそうだとしたら、やつらもこの島に入り込んでるのか。それじゃ早く本を手に入れないと」

グランのはやる気持ちをルリーは抑えた。



「あわてないで。むしろ、私たちはここで休むべきだと思うわ」

「どうしてさ？　ここにいたら危険だぞ」

「パズルマップは宝に近づくとすごい光を出すのよ。いまは夜だから、そんな明かりがあったら私たちの場所がばれるかもしれない。

夜の間はパズルマップは隠すべきよ。でも、隠したら進めないからここで休憩すべきだと思うの。夜が明けるまでね」

グランは説得され、その場に落ち着いた。

## 第14話 「禁断の書物」

翌朝は運の悪いことに曇りだった。それほど暗くはないものの、明かりは少なからず目立つ。二人はできる限りパズルマップの地図を記憶し、わからなくなったときにみるという作戦をとった。いまやこの山の下はローレンツの下っ端たちが、宝を探すと共に二人の行方も追っていた。ただ、この山はあまりの部下がいないのか探るのは後回しになっているようだった。後回しされているうちに彼らは宝を手に入れなければならなかった。

山は登ることに険しい道となり、登ることに対する苦労が始まった。まだ、森の中のほうが楽であるように思えた。そのなかでも、彼らはほとんど休みをとらずに登り続けた。いつローレンツの手がやってくるかわからないのだ。

そして、その日も暮れ、あたりが真っ暗になったとき、彼らは山の頂上へと到達した。パズルマップの輝きはもはや、隠す物から光りをもらしているほど強くなっていた。

頂上は狭く、真ん中にひとつの台座が置かれていた。その台座はとても傷ついており、誰かがこれを壊そうとしていたのは明らかだった。そこまでしてここにあるものといえばやはり、あの本なのだろう。台座にははめ込める場所があり、それがパズルマップと同じ大きさであることをルリーは瞬時に悟った。

「パズルマップをここにはめ込んでみてよ、グラン」

グランはパズルマップを言われたとおりにはめ込んだ。パズルマップの輝きが急速に失われていき、その場所は真っ暗となった。と、そのとき、足元がゆれ始めた。そのゆれは大きく、ワール島全体を揺るがしていた。そのゆれの元は、この山自体だった。

そのゆれと共に、どんどん台座が二つに割れ開いていた。それはゆれが収まると共に開き終わり、そこには下へ向かう階段ができていた。

「この中なのかも……」ルリーはつぶやいた。「いきましよう、グラン」

狭いその階段をしばらく下りていくと、真っ暗でどうなっているかはほとんどわからないが、ルリーは燭台があるのに気がつき、それに火をともした。そこは広い正方形の部屋　　といっても広間とは言いがたい　　だった。殺風景で、部屋の中央に台座があるのみ。後は、部屋の四隅に燭台があるだけだ。ルリーはすべてに火をともし、中央の台座をのぞいた。

「なにもないな」グランはつぶやいた。

「そうみたいね……」

台座には何も置いてなければ、何も書かれていたなかった。つまり、何の変哲もない台座であるとグランは思った。逆にルリーは、部屋の中央に台座があるのに何も無いのは変だとにらんだ。そうにらんだ、ルリーは台座を調べ始めた。しかし、これといったものは何一つない。ただの台座は台座だった。

「いったい、どこに本はあるんだろうな」グランは独り言をいうようにいった。

ルリーは台座から目を離し、部屋全体をみわたしてみた。しかし、風景はまったく変わっていない。

「いや変わった」ルリーは心でつぶやいた。「私たちがこの部屋に入ったときとは違うもの」

ルリーは、その変わったものに気がつくと、階段を一段だけ上った。

「どこにいくんだ？」グランは驚いた様子で訊いた。

「どこにも。ちょっと、グランもこっちにきてよ」

部屋に誰もいなくなると、ルリーは風の魔法を使い、すべての火を消した。真っ暗だ。彼らが最初に来たときの風景……。しかし、一点だけ違っているのが、台座の上が光っていることだった。

ルリーは台座に近づき、その光をみた。文字になっていた。

「『書物はここにあり。魔法使いは触れぬよう』」

ルリーがそう読み上げると、台座の上の部分だけが開いた。そして、暗くてわからないが何かがあるようだ。

「ルリー！ さわるなよ！」グランは大声で注意した。

その声をきいてルリーははっとした。自分の手でそれをとろうとしようとしていたからだ。グランはルリーと場所を入れ替わり、何かを手にとると、懐に収めた。これもスーピアからの教えで、ルリーにできる限り本を見せぬようにわれていたのだった。

「本は手に入れた。ルリー、燭台に火をつけてくれ」

ルリーは言われたとおりに火をつけようとしたそのとき、階段からドタドタと誰かが降りてくる音がしてきた。それをきいたとたん、二人は恐怖に襲われた。やつらがくる！

グランは本を出すのではなく、剣を取り出し、階段の前に立ちふさがった。

「こんなところにいたのか」彼らはその声を知っていた。相手はいまつを持っており、その顔も照らし出されたのですぐ思いだすこともできた。

「お前はゲチトキ島のかの！」グランは言った。

「よく覚えていたな。そうさ、お前たちと交渉してたやつはこのアルビン様だ。そんなことより、お前たちが手に入れた書物をこっちに渡してもらおうか」

「書物だと？ そんなもの知らないね」

「ここにあることはわかつている。そして、この場にいるお前たちはそれを手に入れた。違うか？」

「違うね。おれたちはそんなものを手に入れてない」

「あくまでもしらばくれるか」アルビンは怒りをこめていった。

「しらばくれるものにも知らないものは知らないんだ」

「あくまでそういいはるか」アルビンは穏やかに言った。「ならば力づくで奪うまで！」

アルビンはサーベルを取り出した。狭い階段では後ろにいるローレンツの下っ端たちは戦いに参加することはできなかった。グラン

はなれないその剣で、アルビンを階段から下ろさないようにし、後援されないようにふさがっていた。しかし、このままグランが耐えられるわけがないとルリーはちゃんと知っていた。だからこそ、彼女はどうかしてこの状況を打破しようと考えていたが、何も思い浮かんでこなかった。

唯一の出口がローレンツにふさがれていては、もう外にできることはできない。壁を破るにも、山の中であるから外にでるまでは相当時間がかかり、その間にグランはやられてしまうだろう。天井も同じ理由で不可能だ。ただ二つ、どちらも危険を冒してならば打破する方法を思いついていたが、どちらも実行する気にはなれなかった。だが、どちらかを実行するほかはこの状況の打破は無理なのだから、どちらかをしなければならなかった。

グランの様子が少し悪くなったようにルリーは感じ取った。さすがにこのままではまずい、そう感じ取ったルリーは二つの打破する方法のうち、まあ安全性があると思われるほうを選び、実行することにした。

「やめて！」決心したルリーは大声で言った。

その声に、グランとアルビンは武器同士がぶつかりあったまま、彼女をみた。

「書物は渡すわ」今度はおちついた口調で言った。

「おいおい、何を言い出すんだよ！」グランは驚いき思わずいった。「いいの。もういいわ。このままじゃ、私たちは死ぬばかりだもの。書物を渡したら、ここから出してくれるんでしょうね、アルビン？」

「やはり持っていたんだな。書物さえ手に入ればお前たちに用はない。逃がしてやってもいい。まあ、そんなことなど死ぬまでの時間が減るだけであるがな」

「グラン下がって」

グランはルリーを少し軽蔑の目で見ながら、アルビンの前から体をどかした。

「いったい、ルリーは何を考えているんだ。」

ルリーはアルビンの前にたち、ポケットから書物を取り出す動作をしようとしたそのとき、彼女は風の魔法　それもワール島に入るときに使ったあの風の魔法を放った。不意につかれたアルビンはその場にこけ階段に頭を打った。後ろの部下たちも転ぶか吹き飛ばされて、後ろのものとぶつかりドミノ倒しのようになるかになった。「さあ、グラン逃げるわよ！」

そういいながらルリーは階段を　段はローレンツの者たちだが上っていた。グランもその後続き、その場を後にした。

## 第15話 「レン・ローツ」

あたりはいつそう暗くなっていた。何も輝きがなく、相手の顔を判別するのさえ苦労していたが、グランは燭台にあつたろうそくを持ってくる暇があつたのか持つてきており、明かりを灯した。

それと同時に、前方から男の声が聞こえた。

「あの状況をよく打破したものだ」

「誰だ！」

ろうそくが作るあかりの中に一人の男が映された。無精ひげがあり、ローレンツの服装と同じくダークブルーの服をきているが袖はあり、ベルトには剣が納められている。その剣は真つ青で、ところどころに赤いしみのようなものが付着しているのをなんとかルリーは認められた。

「君たちはよくここまで、導いてくれた」とその男はいった。「感謝の意を表せないほどだ。だが、本を渡してくれなければ、その感謝はどこかへ吹き飛んでしまうというものだよ」

「ふん、結局はあの本がほしただけじゃないか」グランははき捨てるようにいった。

「私たちが、アルビンから逃げてここまで来た理由はわかっているんでしょう？」

「本を渡さないため、そうでしょう？」

「そのとおり」とルリー。「まあ、渡すといつても、人から物をもらうのに名乗らない人には渡さないけどね」

「これはとんだ失礼を」

男は少し間を空けてから改めるように

「わたしはレン・ローツと申します。ローレンツの首領とでも申し上げれば、名前はすぐ覚えられることでしょう」

レン・ローツ……ローレンツ……。簡単なアナグラムだ、とルリーはすぐに気づいた。しかし、それを知ったところで何の意味もない。今はローツの手から逃げ出さなければならぬ。書物を渡して

は、この世界が破滅してしまうのだから。

「ところで、本は渡していただけるのですかな？」ローツは早い口調で言った。

「お前は渡してもらえなくても思ってるのか？」とグラン。

ローツは少し微笑を浮かべながらいった。

「もらえるとは思っていませんよ。ですが、もらえなかったら、わたしがどんな手段に出るかはご承知なんでしょうな」

思わず二人は息を飲んだ。ローレンツの下っ端たちがやるうとしたことを考えれば想像は容易だ。だが、グランはこの男が、そんなことをやりそうではないように思ったが、ローツが剣に手をかける準備をしているのを見て、間違っているのがすぐにわかった。ローレンツの下っ端だろうが首領だろうが、やることは同じ……。

「もちろん、承知だとも」とグランは言った。「おれらを殺し、書物を奪うんだろ。だけど、そんなことができるでも思ってるのか？ 二人を一人で相手にすることなんかできやしないよ。ましてや、おれたちにはな」

「その自信がどこから来るのかわかりませんね」とローツ。「わたしが何者かを君は完璧に理解していないのでしょうかね。あなたはとうですか？」

ローツはルリーに視線を移した。

「あなた、私がどんな人か知ってるんでしょ？」

「もちろん、あなたが魔法使いであることはすぐに察知しましたよ。魔法使いは魔法使いがわかる、とでもいうのでしょうかね」

「まさにそのとおりだわ」とルリーは同意した。

「おいおい、じゃあ、あいつも」 少し間をあけてから 「魔法使いだっていうのか」

「いかにもそのとおり」とローツ。「わたしの魔法から逃げ出すことなどできない。そこのお嬢さんがわたしの魔法を防ぐ魔法をつかるとは思えませんね。これでもまだ書物はいただけませんか？」

「誰が渡すか」



グランがいうのをルリーは抑えた。

「まって、グラン。ここは冷静に考えるべき」

それに驚いたグランはいった。「冷静にもこうにも……」

「ふふ、時間がほしいというわけですね」不敵な笑みを浮かべながらローツはいった。「いいでしょう。五分間だけ待ちましょう」

五分の猶予が与えられたが、何が何でもグランはルリーのこの提案が理解できなかった。そして、彼女にどうしてこんなことを言い出した理由をきいても理解することができなかった。

「どうせ死ぬなら、まだ後のほうがいいわ」と彼女はいった。「ほかの人に連絡ができるんですもの」

グランはルリーに反論したものの、彼女は考え方を変えなかった。ささやくような声で話していたが、グランの反論の声は叫ぶような大きな声だった。

「さあ、五分だ」と、ローツはいった。

「渡すわ」とルリーはいった。

グランは最後までルリーに反論したものの、結局、グランは折れずルリーが自分の意見をおしたままだった。

ルリーはローツに近づいた。だが、そのときグランは思いだした。書物は自分が持つてゐるじゃないか。ルリーは本を持つていないのに、ローツに近づいていつている。ルリーの考えはいったい何なのだろう。

そう思った瞬間、ルリーはローツに強力な風をお見舞いさせた。

ローツは不意にやられたため、足を崩し、その場に倒れた。

「グラン！」

ルリーはそう叫びながら、その場を去っていかうとしていた。グランはその後に続いた。

ルリーに近づくとグランは、走りながら言った。

「いいのか？ 逃げてもやつの魔法にやられるんじゃないか？」

「遠隔操作の魔法なんて知らないわ」はき捨てるようにルリーはいった。「あくまであの場から何もせず逃げ出したらダメだというだ

けで、何かした後に逃げ出せばまったく問題ないの。よし、ここでもいいわ」

ルリーは下山途中の何もない場所で止まった。

「グラン、本を出して。ここで燃やしてしまうわ」

グランは本を出し、ルリーは火を出す魔法を唱えている。だが、それはいとも簡単にさえぎられ二人は走り出さなければならなかった。なぜならば、上から落石があり二人を襲ったからである。落石回避後、上を見るとローツがおり魔法を使って落石を作っていたのだった。

いくら走りその場を去っていかうとしても落石が彼らを襲う。だが、その落石が彼らの前におちることはなかったし、障害物もなかったから何とか下山し、ワール島の土を踏むことができたが、それと同時に彼らの前にローツが現れた。

## 第16話 「紛失」

「わたしの魔法からは逃げられないといったでしょう」ローツは言った。「まあ、お嬢さんが考えていることはおおよわかりましたが、まさか本当にやってのけるとは思いませんでしたよ」

「本を渡すわけには絶対にいかない。何をされようと私は絶対あれを渡さないわ」

「しかしどうするのでしょうかね。今日はすでに満月の日を過ぎました。それは知ってるでしょう？ だったら、この島はもう外界と隔離されているんですよ。これから出ようなどということはできないでしょうね」

「まさか……」

グランは いや、二人は絶句した。このままローツから逃げても、脱出できずにいずれはつかまるか死ぬかのどちらかになるのだ。このことをシェークとスーピアは考えていたのだろうか。彼らにはまったくこの状況の対処法を教えられなかった。考えていないとかいえないが、十分ありえることだったにもかかわらず。

「頭のいいあなた方がそれを考えていなかったとは、心底以外ですねえ」とローツ。「ああ、それとあなた方の船はわたしの部下たちが壊しましたから、船はもうありませんよ。わたしたちの船がありますが、それにあなた方を乗せるのはあなた方しだいです」

「交換条件……ということ？」ルリーは尋ねた。

「そのとおりです。あなた方が書物を渡す。そしたら、わたしたちの船で島を出ればいいでしょう。なに、心配する必要はありません。島を出たところで、書物を手に入れた時点で、わたしの勝利なのですからね。あなたたちが生きていようがいまいが何の関係もない。

二つに一つです。書物を渡して少しでも長く生きるのか、それとも、書物を渡さずこの場で死ぬか」

ローツは不適な笑みを浮かべながらいていた。

「じゃあ、おれはどちらも選ばない」とグランは言った。

「なんですと？」

「お前の出したやつのもちも選ばないということさ。三つ目の選択肢を選ぶ」

「それは傑作だ」ローツは笑い出した。「三つ目の選択肢。わかるさ、わかりますよ。このわたしを殺してしまおうというのでしょうか？　わたしがいなくなれば、書物は渡さなくてすむし船も手に入る。だが、そんなことができるのも思っているのですかな？　このわたしに勝てるのも思っているのですか？」

「そんなことはやっていなきゃわからないな」そういいながらグランは剣を構えた。

その様子をみたルリーもグランと同意見のようで、何か魔法を使う気になったらしい。

「ならいいでしょう」とローツはいった。「ここで死にたいなら死ねばいいでしょう」

そういったとたん、後ろの山の頂上から何かが爆発したような音が聞こえた。

「な、なにをした！」

「なあに頂上を爆破しただけのこと。いっておきますが、人をあやめれば牢屋の中に入ることになるものですよ。わたしを殺そうという考えはなくなったほうがいいのではないのですか？」

「そんなことをいって、あなたは私たちを殺そうとしている」とルリーはいった。「あなただって、人を殺したら牢屋の中に入ることになるのよ」

「わたしは人間ではない」とローツは冷静にいった。「魔法使い。それは人間という存在をはるかに超えているのですよ、お嬢さん。かくいうあなたもそう。あなたもわたしも人間の姿ではあるが、実際は人間ではないのですよ。人でない限り、罪に問われることはない。

思いだしてもみてください。このワイト諸島の法律に魔法使いに

よる犯罪を罰する法律がありますか？ 人間とはかかれているが魔法使いとはかかれていない。だから、魔法使いは罰せられることはない。だったら、別に問題はないのですよ」

「だからって、お前が入らないという保証はないんだよ！」

グランはローツに切りかかったが、ローツはすばやく横に移動し、それをかわした。そして何をしたかはわからないが、グランを横へと倒した。ルリーはその間に魔法を唱え、ローツの吹き飛ばしにかかったが、ローツもすばやく同じ魔法を使い、風を相殺した。

「それほどで、わたしに挑もうとは」ローツはあきれたようにいった。

そのときだった。後ろの山からすごい音が聞こえてくるのが、ルリーに聞こえたのは。ルリーはとっさに後ろを向くと、なんと、落石してきた岩がこちらに向かって転がってきているではないか！それも一個ではない。数十個もだ。

ルリーはその場から離れ、かわす準備をしていたが、そのとき気づいた。グランが、岩が通るルート上にいるということ。

「グラン、早くその場所から移動して！」ルリーは叫んだ。

グランはその言葉がいまいち最初は飲み込めなかったものの、その耳に入る音で状況を飲み込み、その場から離れルリーのところへとやってきた。

無事に岩はすべてその場を通り過ぎた。二人とも怪我をすることなかったのだ。

「あれ、ローツはどこにいった？」グランはあたりを見回しながら言った。

「逃げた……？ だったらいまのうちに船のところにいきましょう」

「でも、壊したって」

「脅しかもしれないでしょ。やつらの船に行くのは危険だから、まずは自分たちの船からよ」

ルリーの考えは珍しく間違っていた。グリラル団の船は見事に壊され、直すより新しく買ったほうが絶対に安くつくほどの破損振り

である。壊された船の破片で一番大きいものでも、四インチ程度だった。

それがわかったと、海を横にローレンツの船を捜したものの、島一周をしてもその姿はどこにもなかった。

「もしかして、ローツはワール島からでちまったのか？」

「馬鹿なこと言わないで」ルリーはいった。「満月の日でないなら、ローツも出られないはず。だからまだこの島にいるはずだわ」

「じゃあ、船はいつたい……」

「あいつらが、どこかにやったんでしょう。魔法使いならそれぐらいのことはできそうだし。たとえば、風の魔法で陸上でも船を動かすことは可能ですもの」

「こうなったら、先に本を焼くし」

グランは本をポケットから出そうとしたが、手を入れるとまったく何の感触もない。布の肌触りのみである。

「どうしたのグラン？」ルリーは訊いた。

「大変だ、本が　本がなくなってる！」

## 第17話 「強力な魔法」

ルリーとグランは、ローツと対立した場所へと戻り、その辺の捜索を始めた。グランが持っていた本 危険な魔法が書かれているという書物を探しているのである。

「なくしたならあの場所しかないわ」

ルリーのその言葉に従い、その場所を探しているのだが、一向に見つからない。

二人が再度合流すると、ルリーは暗い顔で言った。

「あと考えられるのは、ローツが持っていたということだけ……」

「ああ、それだと大変なことになる。このままじゃ世界が滅びちゃう！」

「急いでやつを探しましょう。まだ、私たちがこうしているということはやつがまだ使っていないということなんだから、まだ間に合うわ」

探すといってもどこを探せばいいのかわからなかった二人は、まずローレンツの船を探し出した。そのローレンツの船は、案外簡単に見つかった。ちょうど、あの謎の小屋があつた場所のあたりにあつたのだ。

「そういえば、あの小屋」とグランはルリーにいった。「いったい、何があるのか入ってみないか？ 何か、あるかもしれないし」

ルリーはそれに反対した。こんなときに、あんな小屋にいったところでなにもないのだから。だが、何かあるかもしれないとグランがいいいはるものだから、ついにルリーは折れた。

小屋のドアは鍵がかかってなかったが、大きな音をして開いた。すると、驚いたことに、小屋の中は暗くてよくわからないが、ローツがいるのをすぐ理解した。

「あなたたち、なぜここが……」ローツは面食らったようにいった。「そんなことをお前が知る必要はない」とグランは得意げに言った。

「それより本をかえせ！」

「ああ、これのことですか」とローツは本を二人の前に差し出した。  
「あなたの隙が大きかったから簡単にとれましたよ」

「そんなことはきいてないの」とルリー。「私たちはその本がほしいのよ。何が何でも返してもらおうわ」

「そんなことはさせませんよ」

ローツはそういうと、強力な風を放ち、グランとルリーを外へと押し出した。

そして、小屋からでてくると、その手には剣を持ち、グランを襲った。グランは横に転がり、それをかわし剣を取り出した。

「不意打ちとは卑怯な」グランは怒りをこめていった。

「別に不意打ちをするつもりはありませんでしたよ」とローツ。「ただ単にあなたが、鈍かったというだけでしょう」

ローツは攻め込んできた。グランは応戦したものの、相手は熟練しており、対応はしきれていなかった。だが、すこしでも対応ができたのは、ルリーが風の魔法を使って、ローツの動きを少しばかり封じ込めていたからだだった。

今度は、ルリーが炎の魔法を使いローツの服を燃やし始めた。だが、ローツはすぐさま水の魔法を使い、火を消し止めた。

「まずはあなたからにしましょうか」

ローツは剣で、グランを少し後ずさりさせると、風の魔法を使い、グランを吹き飛ばした。そして、ルリーに剣で襲い掛かる。だが、それをルリーはまたしても風の魔法で追い払おうと心みたものの、吹き飛ばされることはなかったが、横にステップするだけでかわすことはできた。

ルリーはグランのところにいき、二人は並んだ。敵対するローツは二人をみて、笑みを浮かべていた。

「何が何でも、抵抗するのですね」とローツは笑みとは裏腹に少し怒った口調でいった。

「その本の術を使わせるわけにはいかないんだ。それを阻止するの



が、おれらの役目。その役目を投げ出すわけにはいかない」

「しかし、あなた方がこの役目を引き受ける理由がありませんがね。まあ、その役目を与えたのはおおよそわかりますが。その人物たちが、その役目を果たしてくれなかったらどう思うでしょうね」

グランとルリーは話しているローツから何か怪しいオーラを感じ取った。それは何か巨大な　そして、強力な力。

「お恥ずかしい話、わたしは本の文字で読めないところがありましたね」とローツ。「その読めない部分が肝心の術が書かれている場所なのですが、ほかのページにも術が書かれていましてね。それがどんなものかをお見せしましょう」

ローツのオーラがさらに巨大になった。あたりの木々の葉は、その巨大な力に揺らぐ。突如、ローツの前に無数の光るものが現れた。それは形を変化させ、鋭い刃と化すと、二人に放たれた。

二人はすばやくそれをかわした。だが、光の刃はＵターンし、それぞれグランとルリーを切り裂いた。

「すばらしい！」ローツは叫んだ。「さすが、伝説の魔法研究者である我が父の魔法だ。読めない魔法もすばらしいものなのだろう」

「我が……父だって………？」

「いかにも。我が父は伝説の魔法研究者で、この島を破滅させた魔法を考えたのだよ。その事実を知ったのは、近年のことだったです  
がね」

「だったら、その魔法がどんな威力を持つてるか……わかってるんだろ。そいつを使うとどうなるかわかってるんだろうな……？」

「わかってるとも。世界を破滅させて、このわたしが世界を収めることとなるのですよ」

「世界を破滅させれば、あなただっていなくなるわ」とルリー。「あなただって魔法使いでしょ。魔法を使えば、自分の体がどうなるかを知ってるはずだわ」

「わたしはそれほどやわな体をしてませんから、魔法による体の負荷など忘れましたよ。いまの魔法ですら、そんなものかかってなど

いませんからね。

さて、あなたたちにはそろそろ眠ってもらいましょうかね。わたしは島を破滅に導いた魔法を早くみてみたいのでね」

ローツは再度、光の刃を放ち、グランとルリーはそれをかわすことができず、その場に倒れた。

## 第18話 「倒れる」

真の闇に包まれた静寂に保たれた世界。グランは、その世界の真っ只中にいた。

周りに何かあるのかがまったくわからず、体中がずきずきと痛む。彼はいつたい、自分が何をしていたのかを思いだす暇すらなかった。だが、ある程度たつといった自分は何をしていたかを思いだすことができた。

その後は、ルリーがどこにいるかを探すことであつたが、この暗闇の中で彼女を探すことは到底無理だった。そこで、声をあげてみたもののまったく反応はなかった。それがわかると、手探りで歩を進めた。

コツツ。グランの足に何かがぶつかった。グランはひざをつきあたりを探ると、ふさふさした髪のようなものに触れたので、手をくぐらせ抱きかかえるようにそれをあげてみた。

「おい、ルリー。ルリー！」

小さな声で、グランと呼ぶ声が近くで聞こえた。彼が抱きかかえているのは紛れもなくルリーだった。彼女はまだ気を失っていたのだ。だから、先ほどのグランの呼びかけには応じることができなかった。

「大丈夫か？」

「なんとか……体中がずきずき痛むけど」

ルリーは立ち上がろうとしたが、体が痛み立ち上がることはできなかった。そんな彼女をグランは、そのままにさせ、また、自分もその場に座り込んだ。

「なあ、ここはどこなんだろう？」グランは尋ねた。

「わかるわけじゃない。こんな真っ暗闇の場所じゃ何も見えな  
いし……」

「どうにかして、明かりはつけられないのかな」

「魔法を使えばなんとかなるけど……こんな傷を負ってるんじゃ、使うに使えないわよ。それに、燃やすものがなければダメだし」

グランは、身につけていた剣を探した。なんとも幸運なことにそれは身につけられており、グランは、剣の先なら灯せるのではないかと提案した。

「無理だと思うけど」ルリーは否定した。「それより、私を回復させてよ。こんな状態じゃ魔法は使えないの」

数日たったような時間　実際は一日にもなっていない　が彼らに流れた後、ルリーは魔法をつかるほどまでは回復した旨をグランに告げた。

「とはいっても、火をつけるようなものはひとつも……」

ルリーはため息を漏らすといった。

「じゃあ、だめもとで剣にやってみる？」

その言葉を聞いたグランは喜んで賛成した。一回は反対されたものが、今度は理解される。本来ならいやな気分になるものだが、彼はそんなことがなかった。しかし、率直な話それは成功しなかった。落胆したグランにルリーは言った。

「でも、今のでわかったんだけど、ここに柵らしきものはないみたい。とりあえず、手探りで動いてみましょうよ」

二人は、その行動を起こして自らをのしりたくなった。何の障害もなく、すぐにその場から脱出することができたからだ。

そして、外へと出た……。

闇に包まれたその世界へと……………。

空は雨雲のような雲に覆われ、太陽の光を完全にさえぎってしまった。時が昼でも夜になっているようだった。木々は、不吉な風に吹かれて、不吉にゆれている。

「いったい、どうなってるの……」

ルリーはその光景に驚き、声が必然的に低くなった。グランはただただ絶句していた。数分間、彼らはその光景をその体制のまま見続けていた。

「どうなってるんだ……」グランの第一声だった。

「まさか……この世界は終わった………？」

「そんなはずはない！ あいつは解読できないっていた。一日足らずで、それを解読できるとは思えない。それに、おれが想像していた世界の壊れ方とはまったく違う」

ルリーはしばしの沈黙の後言った。

「よく考えてみると、グラン、私たちは一日だけあそこにいたとは考えることはできないわ」

「どういう意味だ？」

「つまり、私たちは数日も 数週間も寝ていた可能性だってないわけじゃないということ」

「じゃあ、まさか世界は………」

「滅んだのさ」

グランでもルリーでもない声。彼らはとつさに後ろを振り向くと、そこには、服がボロボロになり、傷だらけのローツがたっていた。

「ローツ！」

「あなた、まさか……」

「まさにそのとおり。わたしはこの世界の王として君臨する日が来たのですよ」ローツは苦しそうにいった。

「でも残念だったな。おれらがそれを阻止してやるよ」

「あなたは何もわかっていない。あなた方が生き残っているのは、わたしのおかげなのですよ」

「なんですって？」

「この魔法は、地面より上にいるものにしか効果を表さないとわたしは解読しているとき知ったのですよ。それが本当かどうかを確かめるために、あなたたちを地下室へと押し込んだのです。まさにそのとおりになってしまいましたかね。」

ま、地下にいるものなど限られた人数でしょうし、わたしが王として君臨するための魔法もある。あなた方が勝つことはない。死ぬのが遅くなっただのには、あやまりますよ」

「あやまつてほしくもないね」グランははき捨てるようにいった。  
「そうよ。もう世界が終わったならば、後は私たちができることをやるだけだわ。そのやることは　　あなたを倒すこと」

と、ルリーの頬にピツと痛みが走ると、傷跡が突然できた。

「これでもですか」ローツはいった。

「今は……………」

「光の刃の強化版とでも申しますかな。高速で、人の目に見えないほどのもの。まあ、あなたのような魔法使いたちには見えることには見えるみたいですね」ローツは微笑しながらいった。

「お前……！」グランはうなった。

ローツはただただ微笑していた。

「最後にあなた方の遺言をきいてあげてもいいですが？」ローツは唐突にいつてきた。

「遺言だと？」

「あなたたちを実験に使ったお礼、とでも申しましょうか」

「ふざけるな！ おれたちは死なない！」

「いえ、この後あなたたちは間違いなくこの世からいなくなる。あなたたちの命は、わたしの掌中にあるのですよ。さあ、遺言はありませんか？」

「そんなものあるわけない。おれらは断じて死なない」

「強情な人ですね。あなたはどうですか？」

ローツはルリーをさした。

「残念ながら、遺言を届ける人なんていないわ」

「ほう、それは残念ですね。なら、とつと終わらせましょうか」

と、ローツがなにやら術らしきものを唱えている隙をグランはついた。だが、剣はローツの指二本で押さえられていた。

「なに！」

術が途切れたと思うと、あの光の刃が、剣を折り、グランを引き裂いて、グランはその場に倒れた。

「悪あがきは無用です。剣士でもないあなたが剣を扱いきれるとも

「思いません」

ローツがそう話しているとき、ルリーは炎の魔法で攻撃をしたが、ローツはあっさりとその炎を消し去ってしまった。

「悪あがきは無用だといったはずですよ。どんな魔法でも、私にはダメージを与えることはありません」

「そんなことは絶対がない。絶対にダメージはあるはずよ」

「私は伝説の魔法研究者の息子であるといったでしょう？　はて、直接はいわなかったかもしれませんが。わたしは父の血を受け継いでいる。魔法に断じてダメージを与えられない特別な血が。それこそが、わたしをこの世界を破壊させた魔法ですら通用したのですよ。普通の魔法ではわたしは倒されない！　この魔法で、あなたも始末しましょう」

そのときだった。ローツは、ふらつとしたと思うと体制を立て直し、またふらつとするとその場に倒れたのは……。

「ばかな……………」ローツの弱々しい声が聞こえた。

ルリーには、ローツがいったいどうなったのかは理解できなかった。だが、今ならローツは動けないということだけはわかった。ルリーは、グランの折れて柄から離れた刃を手にとると、ローツを見下ろした。

「やめ……………」

「あなたがいたなからこんなことになったのよ」ルリーは、冷静になつていた。「あなたがいなければ、こんなことには……………」

ルリーは、刃を振りかざすと一気に下へと下ろした。

……金属がぶつかる音がした。ルリーとローツの前からは、刃がなくなつていて、別の剣　いや、剣の柄が変わりに映っていた。「グラン、あなた……………」

「ダメだ、ルリー、そんなことしちゃ。よくローツをみるんだ」

ローツに目をやった。ローツの唇は、だんだん青白くなつてきており、頬も蒼白になつてきていた。目は、上の空になつていて、放心状態のようだった。

「わたし……は……魔法に……はやられ……ない」

「ローツは死に掛けてるといつの……？」

「そうさ。ルリーが、手をくだすまでもないんだ」

「でも、この世界は」      ルリーの目に涙がたまってきた      「こ  
の世界は、こいつのせいで……！」

「だからこそ……だ」

グランはそういうと、ガクツとその場に崩れ落ちた。



## 第19話 「希望の薄い搜索」

「ああ、ついにやったようじゃ」

スーピアは、ローツがこの世を去ったことを感じ取っていた。それは、長年の魔法使いとしての勘ではなく、魔法使いとして、その巨大な力を持つものがいなくなったという確かな感じであった。

「しかし、ワール島は……」シェークは口ごもった。

「うむ、確かにそれはある。じゃが、なんとかなるじやろう。一回、それを味わったワール島は、それより悪くなることはない。あの鉄壁のような渦巻きは、その役割も果たしているのだから」

「だが、彼らは……？」

「それはわからん。とはいえ、こうなってしまった以上希望は薄い  
が」

「彼らがいることは感じられないのか？ ローツのことは感じられるのに」

「ローツは特殊な波動のようなものがあるからわかるだけじゃ。彼らには、それらが無い。少なくとも、わしが感じられるほど強いものじゃない」

シェークは考え事を始めたので、沈黙が続いた。

考えがまとまると、シェークはいった。

「明日、あの島へ行ってみないか？ ちょうど、明日は満月の日だ」  
「いいじやろう。それにわしはやらねばならぬこともあるしな」

ワール島へと降り立ったスーピアとシェークは、その光景をみて愕然とした。それは、すでにグランとルリーは見た景色とまったく同じものであり、彼らと同様の反応を示したまでに過ぎなかったが、それと共に、二人の安否が危うくなった動揺もあった。

歩くごとに、不吉な風が彼らを吹き付けてくる。それが吹き付けると共に、シェークは希望が薄くなっていくような感覚だった。

ああ、彼らはどうしてしまったのだろう……。

数十分歩いたとき、突然スーピアは足を止めた。

「こつちじゃ」

スーピアが歩く方向へと行くと、そこには、息絶えたローツの姿が転がっていた。

「やはり、倒れておったな」スーピアはつぶやくようにいった。

「しかし、あいつらの姿がないな。ん？」

シェークは、ローツの近くにみたことのある剣の柄が落ちているの発見した。彼はそれを手に取り、よくみると、確かにそれは見たことのあるものだった。

「これは、グランの剣の柄だ……」

「ふむ、どうやら彼らがこの辺でローツと戦ったのは確実な線じゃな。剣が折れているところを見ると、結果がなんとなくで想像できるが、周辺を探してみるとするか？」

シェークの心は重かった。ワール島を歩き始めたときに感じた、あの希望が薄くなる感覚に追い討ちをかけられ、歩くのすらつらい状態だった。もう彼らは死んでしまったのではあるまいか。

シェークは彼らと始めてあったときのことを思いだしていた。彼らがこうなったのも、自分のせいではあるまいか？ という疑問が、心をよぎってきたからだ。ワール島に行きたいという彼らの願いをかなえさえないければ、こうはならなかったのだ。彼らを兄の所にいかせたのが間違いだったのだ。

「お前のせいではない。わしにも責任はあるじゃろ。お前ばかりがせめられることはない」

思案中のシェークの顔は曇っていたに違いない。スーピアが、彼の心中を察した。

ほんの微量ながら、それは心の重荷をはずしてくれた。まだ、彼らが生きていると信じる希望が少しわいてきた。

とはいったものの、いくら探しても彼らは見つからなかった。ローツの周りにいなければ、島の中心部から外側へと歩き、探し回っ

だが、グランとルリーはおろか一人いない。またしても、希望は薄らぎ、心の重荷が増えたようだった。

日が暮れはじめた。そろそろ、ワール島から脱出しなければ、あと一週間はこの島で過ごさなければならぬことになる。

「今日のところはかえるしかあるまい」スーピアはついに搜索をあきらめた。

「しかし……」

「ワール島を取り巻く闇は、ローツが消えたことで減っていくがまだ残っている。わしらが、その闇を受ければどうなるかわかるじやろうが」

「『魔法上級者が闇を受けると、魔法が使えなくなる』か」

「いかにも。魔法を使う上での注意事項などが書いてある魔法新書にはそうかかっているじやろ。なに、心配することはない。ルリーは、魔法上級者ではないからな。闇を受けても、使えなくなることはあるまい」

とにかく、彼らは海岸へと出ることにした。現在場所はわかっているが、森は暗くてわかりにくいし、複雑になっているため、海岸から歩き、とめた船のところに行ったほうが早いのだ。

海岸を歩いていると、彼らは、どこからカンカンカン……カンカンカン……という音が聞こえるのを認めた。

それを聞いて、シェークはすぐさま音の方向へと向かった。

これは何かをたたく音だ、グランとルリーがいるんだ。だが、シェークはその音が、壊れたグランとルリーの船の木と木がぶつかる音だったと知り、絶望へと追い込まれた。

「シェーク、今日は彼らのことは考えないようにしようじゃないか。ただただ、つらくなるだけじゃ」スーピアは、彼を慰めるようにいった。

スーピアは、声や顔にこそ出さなかったものの、グランとルリーはこの世にいないと考えていた。あの魔法が使われれば、ローツですら倒れるのだ。彼らが生き残るとは考えにくいのだから。

「考えないなんて、ひどいじゃないか！」

スーピアはその言葉に言葉は返さなかった。シェークの気持ちを察すれば、今の状況では何も言わないのがいいと判断したからだ。そんな彼が異変に気づいたのは、それから三十秒とたったころだった。それに気づくと、彼は後ろをとっさに振り向いた。

二人の男女が、そこには立っていた。

## 第20話 「新たな冒険へ」

「グラン！ ルリー！」

最初にそう叫んだのは、スーピアだった。シェークは、彼より先に気づいていたが、その姿に驚き口をきけなかった。

「お前たち、生きていたのか」

「簡単にくたばると思ってたの？」ルリーは軽蔑するようにいった。「ま、あんな魔法が使われたらくたばったと思うのが普通だと思うけどな。現に、この島はひどいことになってるわけだし」とグラン。「よかった……本当によかった……」シェークがここで初めて口を開いた。

「積もるも話もあるな」スーピアはいった。「じゃが、まずはこの島を出るとしよう。そろそろ、ワール島から出られなくなってしまうからな」

「それから、おれは気を失ったんだ」

グランは、ルリーの行いを止めて気が失ったところまでのワール島の出来事を、スーピアとシェークに話して聞かせた。

「そうか、そうして、あの魔法から身が守られたのか」シェークはいった。

「あの実験がなければ、私たちは死んでしまっていたのよね。ローツに感謝だわ」

「うむ、わしらがお前たちを探していたときに、ローレンツの集団が倒れているのを見つけた。息はなかったしな」

「それから？」シェークは促した。

「グランが気を失ってから、私はローツにはまったく関心を持たなかったの」と、今度はルリーが話しを始めた。「すぐに私はグランの安否を心配して、ローツをほっておき、グランを安静にしたの。まだ、息をしていたし生きているのはわかったから。それから、傷

をふさいだわ。

それからはずっと気が気でなかった。まさか、このまま死ぬんじゃないかってね。別に、グランがいなくなったら困るからって意味だけど。でも、そんな心配はいらなかった。一日もすれば、目を覚まして、動けるようにもなったしね。

その後は、ローツの状態を確認してから、島から出る方法を考えることになった。船は、二つとも壊れているのを確認したし、出る方法がなかったから。とはいっても、やはり船を作るしかなかった。だから、壊れた船の道具を使ったりして船を作っていた。その途中で、あなたたちとあったというわけ

これで、ワール島での話は終わり。私が話した内容はたいしたことないから、別に話す必要はなかったけどね」

「大変だったんだな。しかし、ルリー、君がローツにとどめをささなくてよかったよ。人を殺するのは絶対してはならないからね。人をあやめるのは愚かな行為なんだから」

「グランがいなければ、やってしまっていたかもしれません」ルリーは白状した。

スーピアは、ルリーの心中を察して微笑した。その微笑にほかの三人は、まったく気づいてはいなかったが。

「君たちの成し遂げたことは素晴らしいことじゃ」スーピアはいつた。「世界中の人々の感謝をわし一人でいうのは、まったく足りないかもしれないが、本当にありがとう」

「わたしからもいおう。ありがとう」

「いや、いいのさ。な、ルリー？」

「いいとはいわないけど悪いともいわないわ」

「これから君たちはいつたいうするんじゃない？」スーピアはきいた。「さあ……これといったこともないなあ。とりあえず、ランズさんから情報を手に入れるところから始めるかな」

「そうね。その間に休むのもいいかも。今回の冒険は大変すぎたもの」

「そうか……では、冒険がまたしたくなったらわしのところに来るがよい。今度の冒険の情報は、わしがプレゼントしよう」

「本当か！ その情報は今はないのか？」

「今あることにはあるが……」

「じゃあ、いまくれよ。冒険がそこにあるのに休むなんてことはないぜ」

「ダメじゃ。少しばかり休んでからな。お前たちは、大変なことをしたんじゃないから」

「グラン、あきらめるしかないみたい。こういう人には、何をいつても無駄よ」

ジェル島の港には、新しい船がとまっていた。その船にグランとルリーは、乗り込んでおり、スーピアとシェークと話をしていた。

「これが、新しい冒険の地図じゃ」

そういつてスーピアは、普通の紙でできた地図を渡した。

「パズルマップじゃないのね」

「パズルマップは早々あるもんじゃないよ」とシェーク。

「まあいいじゃないか。冒険ができるものなら。今度こそ、大きなお宝をみつけないとな」

「それと、この船はわたしからの君たちへのプレゼントだ。前の船に近づけたつもりだが、まあ、近づいていなくても勘弁してほしい」シェークは弁明するようにいった。

「いやいや、大丈夫よ。前の船に似ていなくても、ちゃんと動けばいいんだもの」

「何かあったら、また来るとよい。わしらは、世界でのいろんなことを知っているからな」

「ああ、ぜひとも来るよ」

「さて、今日は天気がいいことだし、風向きもいい。そろそろ出発するわよ、グラン」

「わかった。それじゃ、おれらは行くよ」

「うむ、気をつけてな」

「それじゃ、また会うときまで」

「ああ。じゃあ、行こうルリー！」

「ええ。それじゃ！」

グリラル団の新しい船は動き出した。

「で、次の目的地はどこなんだ？」

船のグランとジェル島にいるシェークは、残りの一方にその質問をした。

その質問にルリーは答えた。

「グランが行きたがっていた国よ」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4567e/>

---

トレージャー

2010年10月8日15時00分発行